
IS-インフィニット・ストラトス-二度目の人生

RAVEN

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS - インフィニット・ストラトス - 二度目の人生

【Nコード】

N8706Q

【作者名】

RAVEN

【あらすじ】

最近のIS人気で自分も書きたい衝動に襲われついにやってしまった。

でもオリ主でやると一夏と使い分けられない、なら一夏をオリ主にすればいいってことでうちの一夏は転生一夏です。

ちなみに処女作なんで残念な内容になる可能性高いんで暇つぶしになればいいやくらいの気持ちでご覧下さい。

第1話・二度目の人生・（前書き）

正直見なくていいかも。ただの状況説明になっってしまったんで主人公のことなんざ興味ねえよってひとは2話からでも大丈夫なはず。

第1話・二度目の人生・

突然だが俺は転生者なんだ。

今テンプレ乙って思った奴手を挙げなさい、安心しろ俺もだ。

前世って言うアレだから前回ってことにしとくけど、前回は普通の人生だったね。

面白味もなんもない平々凡々日本人の9割はそうであろうものだったよ。

輪廻転生なんてものが実際にあったのか2回目を手に入れた訳だから、次はもうちょっと楽しくすごそうと思ったわけだ。

色々変わってて気づかなかったけど、ここインフィニット・ストラトス世界みたいなんだよねえ。

そーいや名前を言っただけだったな、俺は織斑一夏インフィニット・ストラトスの主人公だ。

気づかなかった理由は簡単さ、最初は織斑じゃなかったんだよ。織斑の家の親戚でね、両親は俺が小学2年の時に交通事故で死んだ。いきなり死んじゃうんだから参ったよ普通に愛してくれてたからなおさらな。

その後織斑の家に引き取られたんだ、たしか結婚できる程度には離れてるらしい。

しかし参ったね引き取られたはいいけどたしか一夏の両親って蒸発するよな。俺は肉親じゃなくて義理の弟だからなあ原作以上に負担だよな普通に、一夏が原作で言っただけでマジでいい姉なんだよ義姉さん実の弟のように接してくれてるし、なんか原作よりやさしいんだよ。

なんとかして恩を返さないと、大事な義姉さんだ。でもまだ両親はいるんだし、まずは義姉さんと交流を深めつつ勉強だな話はそれからだ。

幸い才能はあるっぽいし、学習能力はたかいから、俺がISを動かせる保証もないしな、ってか動かした方が面倒か。

束姉も色々教えてるしな。

束姉こと篠ノ之束とは原作よりも仲がいい。なぜか気に入られて世話になってる。俺も天才って呼ばれてるからかな、前回4年生大学を出て就職している俺からすればこの年代のなんてできて当たり前だからいまいち実感が無いが、まあ頭の前回は前回より確実にいいな、かなり理解力と記憶力がいいし学習能力がはんぱない

原作では義姉さん、一夏、箒は同列だったはずなのになぜか俺くく義姉さんくくくく箒く越えられない壁くく両親になってんだよ。どうしてこうなった。

第1話・二度目の人生・（後書き）

この話は必要だったんだろうか。
書いたわりには内容がないorz

第2話・隣の家の天才・（前書き）

1話よりましだけどまだ内容がorz
オリジナルが書けない。はやく原作までいきたい。

第2話・隣の家の天才・

やっとならな学校が終わった。大学卒業したのにもう1回小学生やるとか苦痛極まりないんだが。

それに、才能がありすぎるといいうのも問題だ。学習能力が高すぎるから覚える喜びがない。

なによりノイズが酷い。なんだあのうっとうしくて苛々する感覚は。

さて今日も束姉のとこ行きますか。束姉ならまだ未知の分野を教えてくださいな、まあそれもいつまで保つかかわらんが。剣道？やっ

てないよ、どうせ型なんて1日で覚えるだろうし。

第？普通に友達ですがなにか。

「やーやー今日もよくきたねーいっくん」

いつも道理に出会い頭に抱擁を決めてくる。うむ素晴らしい感触だ。このころから立派なものをもちのようであのころはひどく動揺したもんだ、もうなれたけどな。

「どうも束姉」

俺もいつも道理に抱きしめ返す。これやらないと拗ねるからな束姉。

「聞いてよいっくん最近ちーちゃん一夏に変なことを教えるんだとか、むやみに一夏を抱きしめるんだとか、一夏は私のものだと言ってくるんだよー」

相変わらず義姉さんは過保護のようだ。最後がなんか妙だった気がするのせいだろ。

「お前が変なことを教えようとするからだ。そして一夏は私の義弟

つまり私のものだ」

義弟をもの扱いしないでくれ義姉さん。
前回敬虔なフロム信者だった俺からすると義姉さんがセレンさんに
思えてしかたない。

実際何度かそう言いかけたし、言ったら大変な目にあってただろう
が。問い詰めの意味で。

「義姉さんも来てたんだ」

「東一人に任せておくとなにをしでかわからんからな」

「ちーちゃんはこの天才東さんを信用できないのかな？どんなこと
だろうと私がいつちゃんの前で失敗するはずないじゃないか。それ
に私はいつくんの望むことをやってあげているんだよ」

そう東姉は俺に対してただ甘なのだ。俺の言ったことはやってくれ
るし、作ってくれる。

ほんとなんでこんな好感度高いんだか。

やっぱ以上に高い学習能力のせいかな。

「ねーねーいつくんISに乗ってみたいかな？」

「急にどうしたの東姉」

「それにISって女しか乗れないんじゃないかたっけ」

「ISは東さんが作ったんだからそれぐらい簡単だよ」
「やっぱりなんか仕込んでたか。」

おかしいと思ってたんだよ女にしか反応しないとか、そのはずなの
に一夏に反応したとか。

まあ乗れるんなら乗ってみたいが。

それにこの世界は歪んでいる・・・修正する必要がある・・・おつとハスラーワンが乗り移ったぜ。
ISなら動かさないといけないから実感が得られるかもしれないしな。

「乗れるんなら乗ってみたいな」

「じゃあデータを取らないとね」

「データ？」

「そうデータ、生体反応と神経性と脳波を取ってバイオメトリクスを登録しないとイケないから」

完全に俺専用にするのか。俺以外に起動できないように。

「わかったよ束姉」

「明日シミュレータで起動データを取るから、明日も来てねー」

「わかった。また明日束姉」

第2話・隣の家の天才・（後書き）

今回もいまいちな気が、だれか文才をください。
次か数話後には原作までいきたいなあ。

第3話・変化の兆し・（前書き）

頑張った・・・今回はかなり頑張った。

明日テストだった気がするけど気のせいだよきっと。

テストなんて存在しないさ。H A H A H A

第3話・変化の兆し・

「今日はシミュレータだったな」

「そうだよ義姉さん」

「じゃあ行くとするか」

「うん」

「束来てやったぞ」

「どれがシミュレータなの束姉」

「あれだよ」

「あれ？あれでどうやるの？」

「ふっふっふ聞いて驚きたまえ、あの中のイスに座ってヘッドセットを付ければモニターに機体がでてヘッドセットが思考を読み取ってその通りに動くんだよ！」

「束姉凄すぎだよ」

「もっとほめてーいっくん。私いっくんのために頑張ったよ」

「準備できた？いつくん」

「できたよ束姉」

「それじゃあ起動するよ」

うわ、凄いなこれどうなってんだ周りを見渡せるぞ。

「どう？いつくんなんか気分悪いとかおかしいところはない？」

「とりあえず動かしてみてもいいいつくん」

「わかったよ束姉」

うお！すげえマジで考えた通りに動く。不思議な感覚だ、思考で動かすってのは。

「ちーちゃん」

「まあしかたあるまい、いずれ必要になるだろうしな」

「いつくん今からターゲットを出すからそれを壊してみて」

「わかったよ束姉」

武器は・・・ライフルとブレードか、普通だな。

ターゲットが10個出てきた。あれを壊せばいいのか。

まず正面のターゲットをライフルで撃ち抜く。

「1個」

次に右にあったターゲットも撃ち抜く。

「2個」

そのままの勢いで並んでいるターゲットを撃ち抜く。

「3、4、5」

ライフルをしまいブレードを出す。

後ろにあるターゲットを壊すため反転して突っ込む。

そのまま縦に並んでいるターゲット一気に切る。

「6、7、8、9、10」

「終わったよ束姉」

「速いな」

「そうだね、予想以上に適正がある」

「だな、良いか悪いかは別にして」

「今からそれと同じ機体を出すから倒してみて」

「了解、束姉」

楽しくなってきた。最高だよロボットを自分の体のように動かせるなんて。

今度はこっちと同じ機体が10機でくる。

正面に3機、右側に2機、左側に1機、後ろに4機いるようだ。行動を起こさせる前にライフルで撃ち左の1機を潰す。

反転し右の2機に突っ込む、途中後ろの4機が撃ってくるが躲して突っ込む。

「見える」

片方が斬りかかってくるがターンで躲しすれ違いざまに切る。

「うかつな奴め」

残りの1機が斬りかかってくるがそれをいなして切る。

「出てこなければやらなかったのに」

銃撃がきたため後退して避ける。

残りが合流したようだ、7機編成になっている。

牽制としてライフルを撃ち込み分散させる。3機と4機に分かれたようだ。

3機の方にライフルを撃ちながら近づく、当然残りの4機が撃ってくるが掠める程度なので気にしない。

射程内に入ったので微妙に離れている1機にライフルを放つ。左に避けられるが、次でしとめる。

2機が撃ってくるがブレードに持ち替えながら回避する。そのまま斬りかかろうとしたら後ろからざわめく感じがしたため即座に左に退避する。

残りが撃ってきたようだが今までとは感じが違う。

後ろを警戒しながら1機切る。そこに残りが斬りかかってきたため、ブレードで迎撃する。

切り結んでいると4機の内1機がブレードで斬りかかってきたため、ライフルで防ぐ。

「くっライフルが、けどまだライフルがやらただけだ」

ライフルの銃身が切り落とされたため、使い物にならなくなる。

使えなくなったライフルを斬りかかってきた奴に投げつけ後ろに下がる。

その後すぐに前進しさつきまで切り結んでいた奴を切る。

「残り4機」

4機の内2機がブレードで前衛残りの2機がライフルで後衛のバランスのいい編成できた。

こっちはライフルがやられたため、遠距離武装がない。

「けどこのくらいならやれる」

ブレードの2機に突っ込む、当然ライフルが撃たれるができるだけ躲し残りは装甲でガードする。

1機に斬りかかる。迎撃されるが気にせず押し込む。

もう片方が斬りかかるが、蹴りで迎撃する。

切り結んでいる奴を後ろに飛ばし、即座に追い打ちをかけ落とす。

ライフルが撃たれるが落ち着いて回避する。

「わかるっ敵の動きがわかるぞ」

奇妙な感覚だった。まるで全体の動きを把握できるように動ける。

不意打ちがきても直感が教えてくれるため回避できる。

「残り3機」

「一気に片付ける」

3機に向かって最大速度で突っ込む。

ブレード持ちをすれ違いざまに切り、残りの2機に向かう。

ライフルを回避しつつブレードレンジまで近づきライフルを切り飛ばす。

無防備になったところで蹴り飛ばしもう1機のライフルを回避して、ブレードに持ち替えた奴を落とす。

ターンして最後の1機に向かう。小刻みに動きライフルを回避、当たらないことを悟ったのかブレードに持ち替える。

ブレードで斬りかかってくるが当たる直前にターンし後ろに回り無防備な背中を切りつける。

「敵機的全滅を確認、任務完了」

「どうだ？」

「これは・・・予想以上に凄いよ。IS適正はB+だけど戦闘適正がS+しかもほとんど被弾してない」

「前から勘の鋭い奴だとは思っていたが・・・ここまでとはな」

「途中私が動かしてただけで背後からの不意打ちも完璧に対処してたしね」

「あの超直感と超反射だ、あれくらいは楽勝と言うことだろう」

「どうだった束姉、義姉さん」

「いやー楽しかった。」

予想以上にうまくできたしな。

「凄かったよーいっくん」

「確かに凄かったな、今までこういったことはやったことなかったはずだが随分うまくやったな」

「なんとなくできたんだ。思う通りに動いてくれたし、動きもわかったから」

「そうなぜか動きがわかったのだ。」

「これなら大丈夫そうだね。データを纏めたら早速コアに書き込むよ」

「いっくんも疲れただろうから休んだ方がいいよ」

「確かにちよつと疲れたかも」

「初めてだからねー」

「そうだ、私いっくんの機体作ったら姿くまますことにしたから」
「そういえばそろそろ失踪時期か。明言はされてなかったけど第4年で引越したってことは、その少し前くらいだろうしな。」

「行くのか？」

「うん。最近周りも五月蠅くなってきたしねー」

「いっくんと会えなくなるのは残念だけど、しかたないかな」

「でも準備するのに1年はかかるから、それまでいっくん分を補充することにするよ」

「なんだそれは」

「いつくんに抱きつくことによって得られる最高のエネルギーだよ。これさえあれば束さんは世界とだって戦えるね」

「しかしお前でも1年かかるのか」

「かかるよー前々から準備はしてあったけど、正式なデータはとってなかったし、なによりいつくんに渡すんだから最高に仕上げないといけないからね」

「俺も手伝うよ束姉」

「そうしてくれると助かるかな、いつくんには私の知識をほとんど教えたからねー」

「しかるべき施設さえあればいつくん1人でも作れるだろうしね」

「まあできないこともないだろうけど、さすがに全部1人でやるのは、面倒（大変）だよ」

「本音と建て前が逆になっているぞー夏」

「あはは」

「まったく、そんなところまでになくてもいいだろうに。どうしてもくれる束お前のせいだぞ」

「失礼だなちーちゃん。私は効率的なやりを教えたただだよ」

「それに面倒という感情は効率化では非常に重要だよ。面倒なことを簡単にしたいという思いが人類の英知を生んだのだから」

「それは否定せんがお前の場合ものぐさなだけだ」

「そつえばいつくん」

「なに束姉」

「高校になったらIS学園に通うことになるけど、大丈夫？」

「IS学園に？」

「そう。世界相手にいつまでも隠せる訳じゃないし、隠していると使えないからね。使えない道具に意味はないよ」

「たしかにそうだね」

「まあこの束さんが教えているんだから意味はないけど、時間がで
きるからね」

「3年間は手出しできないか」

「3年あればどうにでもなるしね。まあ今でもやろうと思えばできないこともないけど」

「そつだどうせならIS学園に入学するころに届けるよ」

「なにを？」

「IS」

「1年で、できるんじゃないのか」

「IS学園に入るまで秘匿した方がいいからね。ISがあれば情報が漏れるかもしれないし」

「混乱してくれた方がやりやすいからね」

「そこらへんは、東姉にまかせるよ」

「天才東さんにお任せあれ」

第3話・変化の兆し・（後書き）

前2話より内容は充実させたつもりだけど・・・戦闘描写が難しい
ーーーー！！

うまく書けたかいまいち自信ないんでよかったですらアドバイス下さい。

2月15日修正

ヘタレさんの指摘を受けて大幅修正

第4話・最後の日常・（前書き）

前3話を修正しての最新話。

オリジナルの日常話、ぶつちやけ戦闘より大変だった。

気づいたら膨大な量に、2話に分けた方がよかったかも。

でもそのまま掲載、次は原作突入だから6話で原作よりも5話で原作のほうがry

第4話・最後の日常・

束姉は失踪して、篠ノ之家は引っ越していった。

まあ束姉とは普通に連絡とってるけどね。

ちなみにデータは今も取り続けている。進化ロジックを組むのに必要だからな。

自己進化システム？あんなの所詮汎用だよ。俺のデータを使った進化ロジックを組んで俺に合った進化をするようにね。

ISの自己進化は最適化だろ、膨大なデータが必要だし。最初からある程度示しておけばより良い方向に進化する。

そついやびつくりなことに、サイコフレームがあつたんだよね。しかも、俺はニュータイプの様だから機体はサイコフレーム搭載機ですよ。

ブルーティアーズなんて目じゃないね。あんな劣化ビットいやインコムか。

まあニュータイプのはずなのに感じ方が強化人間ぽいのが気になるが、実はナニカサレテルのか？

そんな記憶はないが、まさか試験管ベビー？・・・なわけないか。学校にいた時の苛々は周りの思念というか思考を感じ取ってたからみたいなんだよ。

すっげー不快で苛ついたが、頭痛はなかったし大丈夫だろ。強化人間なら頭痛が起きるはずだし。

今は制御できるようになったから、そんなことはなくなったが。慣れるまでは大変だったよ。いきなり他人の思考が入ってくるんだよ、ガンダムのニュータイプはよく耐えられるな。

感応現象だけは絶対起こさないようにしているよ、ニュータイプだけれど。思考と感情だけで不快なのに共感なんて絶対無理、耐えられる。僕の脳量子波を乱すなってやつだよ。

ちなみに中学生になりました。両親はいつまにか消えてましたよ。
あの人たちなんで俺引き取ったんだろ・・・世界の修正力か？

鈴とも友達になったよ。鈴はいいね付き合いやすい。

裏表がないから感じ取っても不快感がない。

親友って感じかな。鈴もそう思っているはずだ、好意もある程度読み取れるし、赤くなるとか分かりやすい反応もしないしね。

そうそう山田先生とも知り合ったよ（まだ先生じゃないけど）俺がISのこと知っているからな、義姉さんについて行ったりしてたら知り合った。

さすが代表候補って感じだったね、なにあの超射撃、相手がなすすべなく蜂の巣になったんだけど。
原作でなんで転けたんだろ、単にドジっただけかな。

おっと鈴が来たようだ。

「一夏、今日千冬さんいる？」

「いないけど」

「なら一夏の家っていい？」

「いいけど、鈴って義姉さんいないときばつかだよな」

「し、仕方ないでしょ、苦手なのよ。いるときに行くと威圧される
というか品定めされているというか」

「はは、まだ苦手なんだな」

「最初の印象が強すぎるのよ」

「まあ、あれは俺もびつくりしたからなあ」

「義姉さんはちょっと過保護だからなあ」

「ちょっとじゃないでしょ、どう考えても」

「で、どうしたんだ突然家に来たいなんて、なんかあったのか？」

「やっぱりわかる？」

「わかるに決まってるだろ、小5のときに来てからほとんど一緒だ
つたんだ。鈴はなんかあると俺の家に来たがるからな」

「まあ、そうじゃなくても今回はわかりやすかったけどな」

「そんなに？」

「普段通りにしているつもりでも明らかに暗かったからな、1人の
ときはとくに」

「そっか」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「私、国に戻るかもしれないんだ」

「国って中国か？」

「うん」

もうそんな時期か・・・鈴が来てから学校もそれなりに楽しかったからな、すっかりわすれてたよ。

「両親の仲が悪くなってきてね、離婚するかもしれないんだ」

「おじさんとおばさん仲良かったのにな」

「それで国に戻る可能性があるから一夏には先に言っておこうと思
つて」

「一夏にはさ、感謝してるんだ」

「突然なんだよ」

「私が来たとき一夏が世話役みたいなやらされたじゃん」

「俺が一番適任だったからな」

「めんどくさそうにしながらも、色々教えてくれたし」

「俺は命じられたことをこなしたただけだ」

「一夏のおかげで友達もできたし」

「世話役から解任されたかったただけだ」

「照れるな、照れるな」

「照れてねえよ」

「ふふっ」

「なんだよ」

「そうゆう所は変わってないんだなあって」

「勝手に言ってる」

「拗ねるな、拗ねるな」

「拗ねてねえよ」

「ほんと、一夏って普段は大人っぽいのに変な所で子供なんだから」

「んなつ・・・あーもうわかった俺の負けだ」

「素直に最初からそう言えばいいのに」

「一夏も言ったようにずっと一緒に過ごしてきたんだから、一夏が私のことがわかるように、私も一夏のことにはわかるんだから」

「それもそうか」

「でもさっき言ったように一夏にはほんとに感謝してる。日本でこんなに楽しく過ごせたのも一夏のおかげ」

「別に、俺も鈴といるのは嫌いじゃなかったし、俺のしたいようにしただけだ・・・その・・・あれだ楽しかったしな」

「うん、私も楽しかった。」

「だからここを離れるのは、一夏と一緒にいれなくなるのは寂しい」

「戻るのが決定してるような言い方だな、まだわかんないんじゃないのか」

「一夏もわかってるでしょ。かもしれないだとか可能性なんて私の希望、実際は確定よ」

「・・・そうか」

「一夏は？」

「なんだ」

「一夏は私とられないのは、離れるのは寂しい？」

「寂しいわけないだろ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・そうなんだ一夏は寂しくないんだ、私は寂しいのに、一夏は私がいなくなったら私のことなんか忘れて他の女の所に行くんだ」

「待て、人聞きの悪いことを言うな。そもそも俺たちはそんな関係じゃないだろ」

「親友がいなくなるってのにそんな反応する一夏が悪いんでしょ」

「寂しいって言うのは本当なんだからね」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「・・・・あーもう、俺が悪かったよ、寂しいというよりも鈴がいなくなると張り合いがなくなると言うか、物足りないと言うか、とにかくつまらなくなるのは間違いない。」

「よかった、そう思ってたで」

「一夏ならそう言ってくれると思ってたけど、私は一夏と違って感じることはできないんだから言ってくれないとわからないもの」

「だから安心したそう思ってたでいて、やっぱりちょっと不安だったから」

「・・・悪い。言わないとわからない・・・か、当たり前のことを忘れていたな。どうにも親友という関係に甘えすぎていたようだ、配慮もかけていたしな。鈴いると自然体でいられるからどうにもな」

「でも一つ言わせてもらえば出会ってから最初の数回以外は感じていないし感じ取ろうともしてない。義姉さんに誓ってもいい」

「1度も？」

「ああ、する必要もなかったしな」

「そう・・・なんだ」

「勘違いしているようだから言っておくが、相手のことを感じ取るのは防衛本能に近いんだ。相手が敵意を持っていないか、敵意ではないにしろ嫌っている人間ではないか、そういうのを感じ取るんだ」

「さっきも言ったように鈴いると自然体でいい、つまり警戒する必要がないから感じることもないんだ」

「そうだったの？」

「でも一夏の説明では」

「ああ、そういえばそっちを説明してたか、まあ普通はそうなんだよ」

「だけど俺は違ってね正反対、他者を理解し、共感し、近づくんじ

やなくて他者を判別し適度な距離を置くため、自分を守るためだ」

「そうだったんだ」

「そつ俺は欠陥品のひねくれ者でね」

「うっん、そうじゃないと思う。一夏は優しいからだよ」

「俺が優しいってなんのじょうだんだよ」

「一夏はやさしいよ。やさしいから不用意に近づかないし、無理に共感しようとしない」

「他人を乱したくない、傷つけないだからそうだったんだよ」

「そんなんじゃないよ、俺は自分が傷つきたくない、傷つけられたくないからこうなったんだ」

「ならなんで私と距離をとらなかったの？最初の頃感じてたんなら、私の不安も感じてたでしょ」

「とる必要がなかったただけだ」

「でもわざわざ近づく理由もないでしょ」

「……」

「あんたはやさしいのよ」

「そう思いたいならそうすればいいさ」

「ええ、そうするわ」
いままでの会話からわかるように鈴は俺がニュータイプだと知っている、と言うより俺が教えた。
そのままだとアレだからそれっぽくな。

「・・・」

「・・・」

「ねえ」

「なんだ」

「写真撮らない？記念に持っておきたいの」

「ならあそこに行くか、時間もいい時間だ」

「いつ見ても綺麗よねここの景色は」

「落ち着くにはちょうど良い」

「それじゃ、撮るか」

「そうね」

パシャ

「明日渡すよ」

「お願い」

「ねえ、一夏」

「なんだ」

「私きつとまた戻ってくるから」

「そうか・・・戻ってきたらまた楽しくやろうぜ」

「そうね・・・戻ってきたときには私の酢豚をご馳走してあげる」

「・・・言葉通りの意味だよな？」

「・・・感じた？」

「虫の知らせ程度にな」

「そつ、ならそうゆうことでいいわ、私も正直はつきりしてないし」

「安心したよ、いきなり言われても反応に困るからな。男と女でなく1人の人間として付き合ってきたつもりだからな、そうゆうことは考えたことがなかった」

「私もよ、まあいきなり離れることになったからなんらかの形で絆を作って置きたかっただと思っは」

「俺たちには必要ないだろ。なにかを形にしなければいけないほど脆弱な繋がりじゃないはずだ」

「そうだったわね、どうも弱気になってるみたい」

「似合わんぞ」

「余計なお世話よ」

「ま、手紙の時代じゃないんだ連絡なんて簡単に取れるさ」

「それもそうね、今は忘れて、らしくなかったわ」

「たしかにらしくなかったな、まあ俺はいいネタが手に入りたいいけどな」

「忘れる」

「やだね」

「まあいいわ、こっちだってネタはあるんだし」

「ふふっ、こっちの方が私たちらしいわね」

「まったくだ」

「さつき絆に形はいらないっていったけど、あつて困るもんでもないからな。形にしたいならこれを持ってけ」

「これは？」

「俺たちの友情3年記念」

「太陽のネックレスってまたあんに似合わない物を」

「それはお前用だからとうぜんだ」

「じゃあ、あんたのは？」

「これだ」

「月のネックレスか、あんにピッタリね」

「最初はこんなベタなものにするつもりなかったんだけどな、俺のキャラじゃねえし。けど妙印象に残ってけっきょくこれにしちまった」

「まあ、たしかにあんたのキャラじゃないわね、月と太陽切っても切れない関係、要するに縁が切れないってことでしょ」

「どう考えてもあんたのキャラじゃないでしょ。どうしたの？」

「だから渡す気もなかったんだよ他の物を用意して渡すつもりだっ

「たんだ。買ってからありえねえと思ってな」

「買う前に気づくでしょあんななら」

「俺は自分の勘に従うようにしているんだ。これも勘がいいといったんだ」

「まさかこんなシチュエーションで渡すことになるとは、我が勘ながらびっくりだ」

「ならあんたの勘に感謝しないとね、普段のあんなならこんなこと絶対しないだろうし」

「当然だ、こんなこっぱずかしいことだれがやるか」

「ありがとねっ一夏、とつてもうれしかった」

「そう言った鈴の顔はとても輝いていた。（綺麗など意地でも言わん）

「まっ、とりあえずこれでお別れはすんだことにしましょ」

「そうだな」

「見送り、こなくて良いわよ。空港まできて見送って別れるなんて私たちのキャラじゃないでしょ」

「ははっ、違いない」

「あとのくらい、いられるかわからないけど、普通に過ごして普通に別れましょ」

「なら家に戻ってこれからどうするか決めるか。精々派手にやろうぜ」

「ふふっ、そうね」

「皆さんにお知らせがあります。鳳 鈴音さんが家の都合により中国に帰ることになりました」

「おーおー、すげー大騒ぎ。」

鈴の奴やっぱり随分と好かれてたみたいだな。

「帰るのか？」

「ええ、今日帰ることになったわ」

「そっかい、じゃあ向こうでも精々ががんばんな」

「一夏もね」

「ぷっ」

「あはははっ、やっぱり私たちに湿っぽいのは似合わないわね」

「違うない」

「じゃあ元気でな」

「一夏もね」

「一夏はIS学園に行くのよね？」

「ああ」

「なら、私もその頃に帰ってくるわ」

「オーケー、なら次はIS学園でな」

「またね一夏」

「またな鈴」

話を聞いてから2週間、鈴は中国に帰っていった。

まあ連絡は取ってるけどな。鈴の奴中国についた途端連絡よこしてきたからな。

そろそろ高校の入試だ。IS学園にいくのも鈴と再会するのもそう遠くない話だ。

俺のISが届くのもな。今から楽しみだよ。

IS学園での3年間俺はどう過ごすのか、そしてそのあとどうなるのか、わからないってのはいいね。

知る楽しみがある。結末のわかっている物語ほど退屈なものはない。やはり人生とは未知との遭遇、刺激があるからこそ楽しい。

なにもない生活ほどつまらないものはない。

それがようやく覆るISによつて。

俺に生きている実感をくれ。

そうそう忘れてた、誘拐はされなかったよ。

多分束姉がなんかしたんだろ。

でもなぜか義姉さんがドイツに行ったから、あの軍人ごっこはくるだろうな。（あんなのは軍人と認めん）

ま、なんにせよ精々楽しませてくれよ。そうでなければもう一度生まれた意味がない。

第4話・最後の日常・（後書き）

なにもなしだと書きずらかったんで西尾維新先生を参考に書いたけどorz

当然ながら欠片も再現できないどころか、雰囲気すらだせない。感想いただけるとありがたいです。

第5話・IS学園・（前書き）

途中でパソコンが誤作動を起こしデータがなくなったためテンションがた落ちになってえらく時間がかかってしまった。

第5話・IS学園・

さて俺は今IS学園に向かっているんだが、来るまで大変だったなあ。

束姉が入試近くになっていきなりあんなこと言い出すから、大騒ぎになったからなあ。

「やーやー只今絶賛行方不明中の天才束さんでーっす。今日はビッグなニュースを伝えるためにこうしているんだよ、そうそう私を捜そうとしたって無駄だよ、かくれんぼは得意だからねえ」
いきなりこれだもんなあ。

しかもなんつーか徹夜明けのテンションみたいな。

「もうすぐIS学園に男の子が行くから、名前は織斑一夏あの織斑千冬の義弟だよ。あーでもでも彼に手を出したら許さないよ、もし手を出したら花火が上がることになるよ。それじゃバイバーイ」
まあ釘を刺してくれたのは感謝してるけどね。

俺でもどうにかできるけど、企業や国の弱みは把握済みだ。

「そうそう彼のISは私が作るから余計なことはいらないように」
そっぴやまだIS届いてねえな。

さすがの束姉でもあれには時間かかるか。

俺もシステム作るのに時間かったしな。

「皆さん入学おめでとう。私はこのクラスの副担任の山田真耶です」
久しぶりにみるなあ、真耶姉。義姉さんがIS引退してからほとんど会ってなかったからなあ。
しかしいつ見ても年上には見えん。

「それでは皆さん、一年間よろしくお願いしますね」

「……………」

真耶姉の挨拶に帰って来たのは沈黙、教室の中は変な緊張感に包まれている所為か誰からも反応がない。
なにこいつら、訓練されすぎだろ。

俺がいるからかねやつぱり。

「じゃ、じゃあ自己紹介をお願いします。えっと、出席番号順で」
なぜか鈴もいるようだ。俺としてはうれしいが現時点で専用機持ちが3人ってバランス悪すぎだろ。

「次は織斑一夏君！」

どうやら自己紹介は俺の番になったらしい。
さっさと終わらせるか。

「織斑一夏、織斑千冬の義弟だ。不運な事故に遭いたくなければ妙な事は考えないことだ」

「一夏、あまり脅してやるな」

「お、織斑先生。もう会議は終わられたんですか？」

「ああ、山田君。クラスへの挨拶を押し付けてすまなかつたな」

「い、いえっ 副担任ですからこれくらいはしないと……」

「諸君、私が織斑千冬だ。君たち新人を一年で使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ。私の言う事はよく聞き、よく理解しろ。出来ない者には出来るまで指導してやる。私の仕事は弱冠15才を16才までに鍛え抜く事だ。逆らってもいいが、私の言う事は聞け。いいな」

こんな義姉さんは新鮮だなあ。俺には結構甘いからな。

「キャ———！ 千冬様、本物の千冬様よ！」
うぜえ耳がキンキンする。

「ずっとファンでした！」

「私、お姉様に憧れてこの学園に来たんです！ 北九州から！！」

「あの千冬様にご指導いただけるなんて嬉しいです！」

「私、お姉様のためなら死ねます！」

なら今すぐ死んでくれ俺の精神安定のために。

「……毎年、よくもこれだけ馬鹿者が集まるものだ。感心させられる。それとも何か？ 私のクラスにだけ馬鹿者を集中させてるのか？」

すげえ鬱陶しそうにしている、これがポーズではなく本気なのだから我が義姉ながら素晴らしい。もっと言ってくれ俺の精神安定のため

めに。

「きゃああああああっ！ お姉様！ もっと叱って！ 罵って！！」

「でも時には優しくして！」

「そしてつけあがらないように躑をして〜！」
頼むから馬鹿は死んでくれ。

「さあ、SHRは終わりだ。諸君らにはこれからISの基礎知識を半月で覚えてもらう。その後実習だが、基本動作は半月で体に染み込ませる。いいか、いいなら返事をしろよ。よくなくても返事をしろ、私の言葉には返事をしろ」

なんという軍隊方式。

まあ軍隊養成校みたいなもんだから間違っていないが。

そこそこ理解している奴がどれだけいるか。

俺？もちろん理解しているさ。ISについては束姉と義姉さんに教わったんだ理解しないほうがおかしい。

それに俺はニュータイプだ。素質による自然開花ではなく黄泉がえりによって覚醒した変則タイプの、亡者の思念をたつぷり浴びているから目の前で1億死のうが揺らぎもしないぜ。

ニュータイプの最大の弱点である死者の思念は、俺には通じない逆に糧となる。

我ながらつくづくニュータイプらしくないな。

俺が得たのは完全に戦闘用の能力、究極の戦闘用ニュータイプとでも言っておくか。

一時間目も終わったが非常に退屈だった。こんな基礎小学校のときに覚えた。

それ以前にここで俺が学ぶことなどないがな。制作者直々に教わったからな。

しかるべき設備さえあれば俺もISを作ることが可能だ。

それにしても視線が鬱陶しい。牽制したから話しかけてくる奴はいないが替わりに視線が凄まじい。

失敗だったかねえ。

「ちょっといいか」

「ちょっといい」

どうやら話かけれる猛者もいたようだ。片方はとても聞き覚えがあるが。

「誰かと思ったら鈴と箒か」

我が幼なじみたちだったよ。

鈴は来ると思ったが。

「廊下でいいか？」

「いいんじゃないの」

「いいんじゃないか」

俺たちが廊下に向かうと進路上にいた女子がざあっと割れた、モ―ゼかよ。

「久しぶりね一夏」

「久しぶりってほどでもないきがするが、まあ久しぶり鈴。箒も久

しぶりだな」

「あ、ああ。久しぶり」

「で、一夏この子は？」

「ちょっと話たと思うが鈴が来る前の幼なじみだ」

「箒こいつは鈴箒がいなくなってから中学2年まで一緒だった」

「鳳鈴音よ、よろしく」

「篠ノ之箒だ」

無愛想すぎだろこいつ。

ガンダム世界ではだいたいコミュニケーションスキルや人間関係の構築のうまさと反比例してパイロットスキルが高くなるんだが、たしか箒はそうでもないよな。

姉と同じで単なる社会不適合者か、可哀相に。

でも姉は天災だからなあ（誤字にあらず）箒の取り柄は剣だろ・・・
たんなる危険人物じゃねえか。

たしか原作でもなんかあつたら竹刀振り回してたし。

「戻ってこれたんだな鈴」

「当然よ。戻って来るって言ったでしょ。今は代表候補生よ私」

「やるなあ」

「一夏と一緒にいたんだから当然でしょ。代表確定できなかったのが残念だわ」

「さすがに代表は年齢的に難しいだろ」

「でもあんたなら余裕でしょ？」

「当然唯一の男でもあるしな。話がなかったのが不思議なくらいだ」

「一夏はISを動かせるのか？」

「だからここにいる」

「そうじゃなくてだな」

「代表になれるほど強いのかってことでしょ」

「あ、ああそうだ」

「実機は動かしてないが束姉にシミュレータやらせてもらった感じからいくと余裕だな」

「実際に動かしてないのか!？」

「ああ、まだ束姉がいたころ適正調べてシミュレータやっただけだ。束姉の放送で試験パスだし」

「それでよく言えるな」

「だって義姉さんより弱いだろ。なら余裕さ」

「ま、あんたが勝負事に負けるわけないしね」

「そゆこと」

「随分仲がいいんだな」

「鈴とか？そりや当然だ。なんたつて親友だからな」

「親友？」

「そ、親友一夏とは妙に馬があつてね。異性間で友情は成り立たないなんていうけど、何事にも例外はあるもんよ」

「異性間では無理なんて言う奴はたんに色欲に走っただけだろ」

「色っ！？」

「一夏ストレートすぎ。女の子の前なんだからもうちょっとオブラートに包みなさい」

「そついや女子の前だったな悪い悪い」
親友と武士娘だったから女子だと認識してなかったぜ。

「一夏、あまり失礼な事は考えないように」
なぜばれたし。

キンコーンカーンコーン

「もう戻らないとな」

「そつね」

「そうだな」

しかし存在感が薄いせいかなチュラルに幕の存在を忘れそうになる。

授業が始まるが退屈で仕方ない。寝たいけど寝たら義姉さんに怒られるだろうしな。

報告書でも確認するか。報告書はアナハイム・エレクトロニクス（長いので以下AE）のものだ。

AEは俺と束姉が設立した。社会的地位を得るには企業が手っ取り早いからな。

行動の幅も広がるしな。いずれ戦争も起こさないとけないし、世界は一応安定しているが今の安定好ましくない。こんな歪で綱渡りな安定ではいつ暴発するかわからん。

歪みは正さなくてはならない。それに戦いが無いのはよろしくない。人類の繁栄と進化には戦いは付きものだ。御大将も言っている。戦いの歴史を否定してはならないと。

平和は次の戦争の準備期間とも言っしね。

「ちよつとよろしくて？」

「あ？」

やっと退屈な授業が終わったともったらこれだ。

朝から苛ついていたら思わずガン飛ばした俺は悪くない。

まさに今時の奴だこれが今の世界だ歪んだ価値観、歪んだ人間、全てが歪んでいる。

「訊いています？お返事は？」

「訊いている。なんの用だ」

「まあ！なんですよ、そのお返事。わたくしに話しかけられるだけでも光栄なので、それ相応の態度というものがあるのではないかしら？」

力の意味もからぬ小娘が。

「名前も知らない他人に興味はなくてな」

「わたくしを知らない？ このセシリア・オルコットを？ イギリスの代表候補生にして、入試首席のこのわたくしを！？」

ああ、セシリアだったのか。

「代表候補生ねえ。悪いが候補生程度に興味はないんでな、代表になつてから出直してくれ」

たかが候補生程度でなにを偉そうに。

「あ、あ、あ」

「あ？」

「あなた本気でおっしゃってますの！？」

「いたって本気だが」

「信じられない。信じられませんか。代表候補生程度だなんて、どんなものか知りませんか？」

「知ってるに決まってるだろ。俺は織斑千冬の義弟だぞ。代表どこ

るか世界最強を知ってるから言っているんだ」

「た、たしかにそうかもしれないませんが、あなた自身のことではないでしょう。一般生徒と違ってエリートなんですよ」

そのレベルだから言っているんだがな。まあ理解しろと言う方が無理か。

それにエリート（笑い）ねえ。ガンダムでは大抵エリート（笑い）はかませなんだがな。

「本来ならわたくしのような選ばれた人間とは、クラスを同じくすることだけでも奇跡……幸運なのよ。その現実をもうすこし理解していただける？」

選ばれた人間ねえ。ニュータイプでもイノベーターでもないオールドタイプの分際で随分ぼくじゃないか。

「そうか、そいつはラッキーだ」

「……馬鹿にしていますの？」

やれやれ我が儘なお嬢様だ。

「だいたいあなたどの程度ISを動かせますの？」

「さあな」

「さあなってあなたご自分のことでしょう!？」

「ためしてもいかなことを分かれと言われてもな」

「ためしてないって、あなた動かしたことはありませんの？」

「シミュレータをやっただけだ」

「呆れましたわ。実際に動かしたこともないのによくあんなことが言えましたね」

「シミュレータ通りに動くなら問題ない」

「実際に動かすのとシミュレータは違いましてよ」

「動かしたときに誤差を埋めればいいだけだ」

「あ、あなたは」

キーンコーンカーンコーン

「ふう、またあとで来ますわ」

「それではこの時間は実践で各種装備の特性について説明する」
どうやらこの時間は義姉さんのようだ。

「ああ、その前に再来週行われるクラス対抗戦にでる代表者を決めないといけないな」
そっぴやそんなんあつたな。鈴がこのクラスにいるが、対戦相手はどうなるんだか。

「クラス代表者とはそのままでの意味だ。対抗戦だけでなく、生徒会の開く会議や委員会への出席……まあ、クラス長だな。ちなみにクラス対抗戦は、入学時点での各クラスの実力推を測るものだ。今の

時点でたいした差はないが、競争は向上心を生む。一度決まると一年間は変更できないからそのつもりで」

どうせ学生レベルじゃ暇つぶしにもならないだろうし面倒だからやりたくないが……

「はい。織斑君を推薦します」
「やっぱりそうなるか」

「私もそれがいいと思います」
「まったく勘弁願いたいね。」

「他にいないのか？いないなら無投票当選だぞ」

「なら鈴を推薦する」

「一夏っ!？」

鈴がいるんだし押しつけよう。

「鳳だな…他はいなければ投票できめるが」

「待って下さい！納得がいきませんわ！」
「で、決闘フラグと」

「そのような選出は認められません！大体男がクラス代表だなんて良い恥さらしですわ！わたくしに、このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか!？」

ナチュラルに鈴を除外したな。

「実力から行けば私がクラス代表になるのは必然。それを物珍しいからという理由で実際に動かしたこともない人間にされては困りま

す！わたくしはこのよううな島国までIS技術の修練に来ているのであって、サーカスをする気は毛頭ございませんわ！」

「いいですか！？実力トップがなるべき、そしてそれはわたくしですわ！」

残念だけど鈴だと思う。

セシリアは一夏以降負けっぱだろ。

まあ腕云々以前に機体が悪いんだけどな。あの半端なビットのせいで機体事態が中途半端だし。

「大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけないこと自体、わたくしにとつては耐え難い苦痛で——」

文化大国日本なめんなよ。

「文化や文明って言葉からもっとも遠いイギリス人がほざくじゃないか」

「そうよ、メシマズ国家の分際で、私なら耐えられないわね」

「あつ、あなたたちねえ！わたくしの祖国を侮辱しますの！？」

「先に侮辱したのはそっちじゃない。そもそもこっちが言ったのは侮辱じゃなくて事実よ」

「決闘ですわ！」

やれやれ、面倒なことになった。俺は面倒が嫌いなんだ。

「言っておきますけど、わざと負けたりしたらわたくしの小間使い……いえ奴隷にしますわよ」

「あんたはまず負けたときの言い訳を考えときなさいよ」

「ふん！このセシリア・オルコットの实力を示すまたとない機会ですわ」

「さて、話はまとまったな。それでは勝負は一週間後の月曜日。放課後第三アリーナで行う。織斑、オルコット、鳳はそれぞれ用意しておくように。織斑とオルコットで戦い勝った方が鳳と戦う。それでは授業を始める」

勝っても面倒負けても面倒とかそれなんてイジメ。

帰ろうとすると真耶姉が声をかけてきた。

「ちょっと待って下さい一夏君」

「なんです？」

「一夏君の寮の部屋がきまりました」

「そっぴや部屋ってどうなってんだ？あらかじめ分かってたんだから義姉さんが用意してくれてると思うが。」

「色々ごたついて相部屋ですけど、一ヶ月もすればちゃんとした部屋が用意できますから」

束姉のせいだな確実に。

「本来なら用意できたんだがあの馬鹿のせいだな」

「やっぱり？」

「さすがに分かったか」

「まあね」

「じゃあ、時間を見て部屋に行って下さいね。夕食は六時から七時、寮の一年生用食堂で取って下さい。ちなみに各部屋にはシャワーがありますけど、大浴場もあります。学年ごとに使える時間が違いますけど……えっと一夏君は今のところつかえません。調整が間に合わなくて」

そっちもかよ、これが修正力ってやつか。

「えっとそれじゃあ私たちは会議があるのでこれで。一夏君ちゃんと寮に帰るんですよ。」

それにしても面倒な、変な修正を働かせるなよ。

まあいい、せめてまともな奴が相手だといいが、どうなることやら。

第5話・IS学園・（後書き）

半端なところで終わったのは長くなっただため次に回したからです。
次話はたぶん夜中に上げると思う・・・上げられたらいいなあ。
バトルは多分その次

設定（前書き）

原作からの変更点や設定など

設定

原作との変更点

織斑一夏

転生したオリ主でありI T I K Aになる予定の人間
転生当初は織斑姓でなかったため気付かなかったが織斑家に引き取られたときにI Sの世界だということに気づく。
原作やらフラグやら言ってるがこの世界の住人として生きることを決めているため傍観スタイルではない。特に義姉である千冬に恩を返すために束に勉強を教わったりしているため束とは原作より仲が良い。

才能豊富で学習能力に優れているためいまいち満たされない。

前回到引き続き、日常に渴きを感じている。

一度死んだためか、ニュータイプであり、人の感情や思考を感じ取っていたが、その感覚を本人が嫌っておりしばらく反覚醒だったが、それがなんであるか理解し自分がニュータイプだと自覚するとき覚醒した。

また本人のセンスもあるが、ニュータイプであるため戦闘に対する適正は非常に高い。

なぜか感じ方が強化人間に近いため実はムラサメ研究所の出身者じゃないかとか、ナニカサレテイルんじゃないかと疑っているが、木星からならぬ黄泉の国から帰ってきたからだと思っている。
そのせいかニュータイプ最大の弱点である死者の念に強い。

織斑千冬

一夏の義理の姉

両親を亡くして織斑家に来たためか原作よりもやさしく接していた。
そのうちブラコンになり今では原作以上にブラコン

篠ノ之束

一夏も天才と評価されていたためか原作より仲が良く今ではもう一人の姉ポジション

篠ノ之箒

空気（でも原作も基本電池だし変わらないよね）

一夏が剣道をしておらずあまり関わっていないため普通の友人だと思っ（扱いが決まらない）

のほほんさんのレギュラー就任が決定したのででなくなるかも。

鳳鈴音

性別を超えた親友であり、一番気兼ねなく話せる相手

酢豚は言葉通りの意味でありプロポーズではない

本作では鈴だけ別クラスなのが納得できなかったため同じクラス

セシリア・オルコット

今のところ変更点無し

山田真耶

代表候補生時代に面識あり

布仏本音

俺の嫁：間違えた。レギュラー、ヒロイン化、専用機も上げる予定。え？いままでは違ったのかって？よくでてくるゲストヒロイン的扱いでしたよ。

アニメで見ただけど実はすごい巨乳なんだよ、多分放棄クラス。じゃあ胸でも被るし放棄いらんないよね。

IS

ユニコーンガンダム

格好はまんまユニコーン武装を追加してある

常時亜音速で移動可能

クイックブースト時には音速^{アムロアの}

ナノスキン装甲で装甲回復可能

基本シールドと装甲で受けるためシールドバリアーは張ってない

ビーム・マグナム

エネルギーパッカー基につき一発は変わらないが威力はまともに当たってシールドエネルギーを半分削る程度（それでも十分）最大六基連結可能になっている。

ビーム・ガトリング×4

連結してダブルガトリング×2になる。ヘビーアームズのように腕に取り付け可能

ハイパー・バズーカ

変更無し

ビームサーベル×4

変更無し

バルカン砲×2

変更無し

シールド

先端にシールドニードル内蔵

フアング×10

左右のスカートアーマーに五個づつ装備

NT専用にはサイコミュ兵器がないと

IS-Dシステム

ISのコアがあるとき任意に発動可能。デストロイモードに移行するパイロットの意識がない場合自動発動。サイコフレームによって敵意あるものをサーチ&デストロイする

ユニコーンを出したいがためにこの作品を書きました。

中の人と同じ？機体の色も白？ならやってる人いないしやるしかねえ
みたいなのりで書きました

設定（後書き）

随時更新予定

第6話・学園生活・（前書き）

筭に出番を与えようと思ったらしいのまにか鈴とのほほんさんがで
ていた。

な、なにを言っているかr y

第6話・学園生活・

さて鍵も受け取ったし、部屋に行くとするか。

「ここだな」

鍵を差し込むが、どうやらあいているようだ。

部屋に入るとゆとりのある空間とベッドが目に入った。
アニメでも思ってたがなかなかいい部屋のようだ。

「お帰り、一夏」

「鈴？お前が同室なのか？」

どうやら箒は犠牲になったようだ。

「そ、千冬さんに頼まれてね。お前たちなら問題ないだろうってさ」

「確かに問題ないな、俺も鈴が相手なら安心だ。変に気を張らずに
すむ」

「そこら辺を考えて私にしたんじゃないの」

「義姉さんならそうだろうな」

「とにかく久しぶりに会えたんだし、ゆっくり話しましょ」

「そうだな」

「そつえばあんたISは用意できてるの？」

「いや、まだだ」

「勝負には間に合うんでしょね」

「まあさすがの束姉も手こずっているようだが、勝負には間に合うだろ」

そう、さすがの束姉も手こずっているようだ。なぜか引き出せた設計図を俺がIS用に変更して魔改造を施した”ユニコーン”には。

俺も苦労したしなあ。サイコフレームはビットがあったからその基盤から作ったけど、ムーバブルフレームは人間が担当するから、サイコフレームをどこに組み込むかで迷ったんだよなあ。

結局伝達関係に使うことで落ち着いたけど。

サイコフレームのおかげで機動性、操作性は最高だし。

武装も追加したから火力も上がってるし、隠し武器もあるからかなり攻撃的な仕様になった。デストロイモードの名に恥じない機体にNT-DもIS-Dに変えてばっちりだ。

もはやユニコーンでもISでもない気がするがきつと気のせいだ。

「あんたどんなの頼んだのよ」

「現行のIS全てを凌駕するIS」

「相変わらず遠慮なしね」

「せっかく制作者自ら作ってくれるんだ遠慮なんかするよりいいだろ」

「まあそうかもしれないけど」

「鈴のはどんなISなんだ？」

「私のISは甲龍、あまり変な実験要素は入れないで燃費向上と安定性を図ったものよ」

「いいじゃないか。現行の第3世代は技術開発の実験機でどれもこれも兵器としては未完成だ。安定性を求めるのは間違っていない」

「一夏のは？」

「俺のISは全身装甲タイプで装甲、機動性、パワーと兵器に必要なものを全て持たせた」

「でたらめね」

「ま、開発者には敵わんということさ」

「まあ、でも今から楽しみだわ。私と甲龍が二人の天才相手にどこまで通じるか」

「鈴なら楽しませてくれると信じてるさ、お互い考えていることまだいたい分かるのだし」

「そうね」

勝負事に関しては無意識に相手を見下すのは相変わらずのようね。多少の破滅願望がそうさせているのか…やっぱり不安定ね一夏って

「明日も学校なんだ。そろそろ寝よう」

「そうね。お休み一夏」

「お休み、鈴」

只今鈴とついでに誘った篤と朝食中。

「なかなかいけるな」

「そうね、学校の食堂なんてどんなもんかと思ったけどいけるもんね」

「確かにいけるな」

「ねえねえ、彼が噂の男の子だって」

「千冬お姉様の弟らしいわよ」
「義弟だ。」

「やっぱり一日二日じゃ収まらないか」

「当たり前でしょ」

「おっ、織斑君、隣いいかなっ？」
「見ると三人ほど女子がいる。」

まあ断ったところで無駄だろうしなあ。それにこの感じは…

「別にかまわないが」

二人はガッツポーズしているが一人は眠そうだ。

「ああゝっ、私もはやく声かければよかった」

「まだ二日目よ、焦ることじゃないわ」

周りがざわめきだした。ざわっ…ざわっ…とか聞こえそうだ。

その後は大量に自己紹介に来たよ。覚えるつもりもないから適当にながしたけど。

「おりむーよくたべるねー」

眠そうだが凄まじい癒しのオーラを放っている女子が話しかけてきた。

「お、おりむー？」

「織斑だからおりむー、だめ？」

「い、いや別にかまわない」

そう言うのと鈴が驚いたようにこっちを見てくる。

まあ気持ちはわかるが、あの普通にしてみても感じる癒しの波動が二ユータイプ能力で倍率ドンで俺にそうさせるんだ。

これがのほほんさんパワーか…マイナスイオンでも出てんじゃねえの？

「俺は朝多く食べるんだ。エネルギー効率的に考えて朝多めに取るのが一番効率がいい」

夜なんてたいして動かないしな。

「というか女子はそれでよく持つな…ダイエットか？」

「わ、私たちはこれで平気だから」

「う、うん別にダイエットじゃないよ」

「そうゆうデリカシーのないこと言わない。相変わらずねー夏は」

「鳳さんは織斑君と知り合いなの？」

「知り合いもなにも幼なじみよ」

「その筈もな」

周りがまたざわざわしてる。

ざわっ…て聞こえる気がしてならないからやめて欲しいんだが。

「そうなんだ。子供のころってどうだったの？」

「たいして変わらないわよ。妙に落ち着いてて、子供らしくなかったけど」

「あの二人といえば落ち着きもするさ」

「織斑、私は先に行くぞ」

「そうか、また後でな」

「織斑君は…」

「いつまで食べている！食事は迅速に効率よく取れ！遅刻した者はグラウンド十週させるぞ！」

だからそれは軍隊ってか戦場の食事の取り方じゃ。

途端に全員が慌てて食事を取り始めた。

俺はもうすぐ終わるから焦る必要はないが。

やはり退屈だ。鈴の方を見てみると鈴も退屈そうにしていた。
俺が教えたし、代表候補だからなあ。

「というわけで、ISは宇宙での作業を想定して作られているので、操縦者の全身を特殊なエネルギーバリアーが包んでいます。また、生体機能を補助する役割があり、ISは常に操縦者の肉体を安定した状態へと保ちます。これには心拍数、脈拍、呼吸量、発汗量、脳内エンドエルフィンなどがあげられ……」

「先生、それって大丈夫なんですか？なんか、体の中をいじられて
いるみたいでちょっと怖いんですけども……」

ふむ、その疑問は正しい。正常に保つということは、逆も可能だからな。

だからといってない状態で動かしたらオデノカララハボドボドダ
ってなるけどな。

「そんなに難しく考えることはありませんよ。そうですね、例えばみなさんはブラジャーをしてますよね。あれはサポートこそすれ、それで人体に悪影響がでると言うことはないわけです。もちろん、自分にあったサイズを選ばないと型くずれしてしまいますが……」
「そーそー、考えても無駄無駄どうせ理解できないから。
真耶姉が俺の方を見たと思ったらいきなり赤くなった。」

「え、えっと、いや、そのい、一夏君はしていないから分かりませんよね。この例え。あ、あはは……」
たしかに分からん。テンパッて一夏君になっているがいいんだろうか？

真耶姉の誤魔化し笑いで教室に微妙な雰囲気が漂った。
べつにそんな例え話してどうこう思うほど初心じゃないから気にしなくていいんだが。

羞恥心の問題か？周りの女子も微妙に恥ずかしそうだし…若干一名平気そうな奴がいるが、いまさらそんなことでどうこう思う奴じゃないし、ブラジャーの恩恵が少ないからだろうな、はっはっは…なんだっ！？この強烈なプレッシャーは！？

プレッシャーの発生源を見ると、鈴が凄まじい形相でこっちを見ていた。

そっぴや気にしてたな、俺の目算によるとBはあるからまだいいと思うが…プレッシャーがさらに強まった。これ以上は後で殺されかねんからやめておこう。

それにしても鈴の奴いつの間にニュータイプに（違う）

「んんっ、山田先生、授業の続きを」

「は、はいっ」

微妙な雰囲気義姉さんが消し去った。さすが義姉さんだ。

「そ、それともう一つ大事なことは、ISにも意識のようなものがあり、お互いの対話…操縦時間に比例して、ISも操縦者の特性を理解しようとしています」

俺のはもつと高性能だな。

「それによつて相手を理解し、より性能を引き出せることになるわけです。ISは道具ではなく、あくまでパートナーと認識してください」

どう言つたつて所詮兵器で人殺しの道具だろうに。そこら辺自覚させなくていいのかねえ。

「先生ー、それって彼氏彼女のような感じですか…?」

「そつ、それは、その……どうでしょう。私には経験がないのでわかりませんが……」

言つた後に赤い顔してうつむいてしまった。

初心なところも相変わらずのようだ。

それにしてもこの感じここは本当に兵器を扱う場所なんだろうか。この甘つたるい雰囲気からはとてもそうは思えん。

「……………」

「なんですか?山田先生」

いつのまにか真耶姉がこつちを見ていた。

「あつ、いえ、なんでもないです」

なんか視線を感じていたんだが…まあいい。

キンコーンカーンコーン

「あつ、えつと次の時間では空中におけるIS基本制動をやりま

からね」

「ねえねえ織斑君さあ！」

「はいはいいつもーん！」

「今日のお昼暇？放課後暇？夜暇？」

一斉に群がってきた、アリか貴様らは。

「あー、一度に訊かれてもわからないのだが」

整理券を配っている奴をみつけた、有料で。こらそこ人で商売するな、するなら俺に半分寄越せ。

「千冬お姉様って家ではどんな感じなの！？」

「普通にやさー」

しいと続けようとしたら義姉さんがきた。

「休み時間は終わりだ散れ」

どうやら教えてはいけないらしい。

「ところで織斑、お前のISは来るまでもう少しかかる」

「意外だね」

「最終調整をするそうだ」

「そつえば織斑君って専用機が用意されるんだねー」

「しかも制作者直々に」

「いいな」

「あの、先生。もしかして篠ノ之さんって篠ノ之博士の関係者なんでしょうか…？」

「そうだ篠ノ之はあいつの妹だ」

「ええーっ、すごい！有名人の身内が二人もクラスにいるなんて！」

「篠ノ之博士ってどんな人？やっぱり天才なの！？」

「篠ノ之さんも天才だったり！？今度ISについて教えてよっ」
おお、すげえ騒ぎ。

「あの人は関係ないっ！」

「……大声を出してすまない。だが、私はあの人じゃない。教えられるようなことはない」

やっぱり苦手だったんだ。そっぴや俺が束姉のところにいと近づこうとしなかったしな。

まあ気持ちはわからんでもないが。あんな天才が上にいたんじゃないやねえ。

「さて、授業を始めるぞ。山田先生、号令」

「は、はいっ」

何事もなかったように進めるとか流石だよ義姉さん。

「安心しましたわ。さすがに訓練機で対戦しようとは思ってなかったでしょうけど」

宣言通りまたきたようだ。

「まあ？一応勝負は見えていますけど？さすがにフェアじゃありませんものね」

「何故？」

「わたくし、セシリア・オルコットはイギリスの代表候補生。つまり、現時点で専用機を持っていますの」

「そういうことが」

「随分反応が薄いんですね」

「真の実力者なら訓練機だろうと専用機だろうと関係ないからな」

「たしかにそうですね。それがあなたに当て嵌まるかわ別として」

「そういえばあなた、篠ノ之博士の妹なんですってね」

「妹というだけだ」

「すげえメンチビームセシリアが怯んでる。」

「ま、まあ。どちらにしてもこのクラスの代表にふさわしいのはこのセシリア・オルコットであるということをお忘れなく」

「私の存在をことごとく無視するのがむかつくわね」

「まあまあ、メシ行こうぜ」

「おりむー、私もいくー」

のほほんさんが来た。うむやはり素晴らしい癒し系だ、心のオアシスだな。

食堂で昼食を取っているとのほほんさんが話しかけてきた。

「それでありむー実際大丈夫なの？」

「なにがだ？」

「代表決定戦。態度はあんなだけ代表候補生だけあって実力はたしかだと思っよー」

「問題なしだ。俺がISを教わったのは制作者と世界最強だからな」

「それはまた豪華だねー、なら期待できるのかなー」

「期待している。まあ俺はセシリア・オルコットなんか眼中にないがな。それよりも鈴との対戦が楽しみだ」

「勝のは私よ」

「そいつは楽しみだ」

まあなんにせよISが届かないことにはどうしようもない。

「じゃあ勝ってクラス代表になるのを期待してるよ、おりむー」

「任せろ。君に勝利を捧げて見せよう」

事は全てエレガントにつてな。

今から楽しみだ、ようやく戦える。

世界に名乗り上げる時がきた。俺はここにいて、俺は今生きてい
ると。

ISを越えたISを見せてやる。

第6話・学園生活・（後書き）

ようやくISの話題が出せたんで設定にISを載せときました。勘のいい人は気づいてると思いますが。はいご想像の通りです。鈴が動かしやすすぎて困る。気付いたら鈴が出てる。

第7話・クラス代表決定戦 - (前書き)

いつのまにかユニコーンネタをやってる人が出てきてテンションだ
ださがりでえらく時間かった。

ユニコーンネタは俺だけだったのにorz

第7話・クラス代表決定戦・

やってまいりましたよ対決の日が…俺のISまだ届いてないけどなorz

どうせギリギリまで調整して、束姉が来る来ないで義姉さんともめてるんだろうなあ。

さすがにここに来られても困るが…さすがの束姉も来ないよね？ま…まあ大丈夫だろ、義姉さんが止めるはずだ…多分、きつとメイビー。

「一夏、まだあんたのIS届いてないようだけど大丈夫なの？」

「大丈夫だ問題ない、もうすぐ来る…具体的にはあと30秒後」

「お、織斑君織斑君織斑君」

とても大事なことから三回言っただけですね、わかります。

「山田先生、落ち着いてください。はい、ヒッヒフーヒッヒフー」

「ヒッヒフーヒッヒフー」

「それはラーマーズ法でしょ」

「なにをやっている」

「あ、義姉さん」

「そ、それですねっ！来ました！織斑君の専用IS！」

「やっとうですか」

「あの馬鹿が五月蠅くてな…まあ、そんなことはどうでもいい。織斑、すぐに準備をしろ。アリーナを使用できる時間は限られているからな。お前ならどうとでもなるだろう」

「男子たるものこれくらいどうにかしてみせろ」

「がんばってー、おりむー」

「だってさ、一夏」

「なら行くとするか」

ユニコーンの所に。

ピットに入るとすぐに目に入った。

未だ眠りの中にいる白き獣が、俺を待っていた。

「これが…」

「はい！これが織斑君の専用IS『ユニコーン』です！」
まだ一次移行もしてないからか、全然ユニコーンに見えんな。

「フォーマットとフィッティングは実戦ですませろ」

「義姉さんちよつと時間もらっていいかな」

「なぜだ？」

「システムをインストールしないと完成しないからね」

「そういえば、システムはお前が担当していたな、早くすませろよ」

「すぐに終わるよ」

こいつをここに挿してっと…進化ロジック、IS・Dその他諸々インストールっと。

後はデータを消して、壊して終わりっと。

「それは壊す必要があるようなものが入っていたのか」

「まあね、表に出す気はないよ」

「あまり妙なことはするなよ」

「篠ノ之束が作ったんだから、なにが起こっても不思議じゃないよ」

「お前は…まあいい、終わったなら早く行け」

ユニコーンに身を預けると、装甲が次々と閉じていって最後にフェイスが閉じられる。

ユニコーンと繋がった瞬間、ハイパーセンサーによって視野が一気に広がる。

やはり戦闘前の高揚感は心地良い、これだけは何度経験してもいいものだ。

亡者時代は味わうことなく、死んだり恐怖だったり狂気ばかりだったからな、あと戦場。

おかげで恐怖って言葉とは無縁になったが。

あのときの体感が告げている今から始まるのはただのゲームだと。

「じゃ、行ってくる」

カタパルトに乗ると、アリーナに向かって射出される。

「あら、逃げずに来ましたのね」
あれがブルーティアーズか…前から思ってたが近くで見ると武装。
姫にしか見えんな。

敵ISを確認…ブルーティアーズ、搭乗者セシリア・オルコット。
高出力のレーザーライフルとビット兵器による中遠距離専用機体。
高速機動による近接戦闘が有効。

ユニコーンが敵ISの武装と対処法を告げるが元々知っているので
関係ない。

任務内容…セシリア・オルコットに勝利…任務了解
オープンコンバット

「最後のチャンスをあげますわ」

「チャンス？」

「わたくしが一方的な勝利を得るのは自明の理。ですから、ボロボロの惨めな姿を晒したくなければ、今ここで謝るといふのなら、許してあげないこともなくつてよ」

「必要ないな」

「そう？残念ですわ。それなら」

警告敵IS射撃体勢に移行。トリガー確認、初弾エネルギー装填。

「お別れですわねっ！」

キューン！

言い終わると同時に閃光が走るが、このタイミングならもんだいな…

「あ、当たった!？」

直撃はしなかったが、形成途中の右肩が吹き飛ぶ。

馬鹿な…反応できていたはずだ…なぜ当たった、ありえない。
すぐに原因を調べる。

機体の反応速度が追いついてない!？

くそっ初期設定じゃ無理があったか。

バリアー貫通、ダメージ32。シールドエネルギー残量568。実
体ダメージ、レベル低。

バリアーが抜かれたところでユニコーンは全身装甲だから、たいし
たダメージじゃないが…屈辱だ。

まさか機体の反応が追いつかないでいきなり初弾を貰うなんて。

セシリア side

「あら、逃げずに来ましたのね」

カタパルトから織斑一夏が飛んでくるのを確認する。

織斑一夏…あの織斑千冬の弟にして、世界で唯一ISを操れる男。

でもそんなことはわたくしにはどうでもいいこと、重要なのは今の
時代ではめったにいない、強い意志を持ち、言葉にできる男だとい
うこと…もしかしたら、彼がわたくしの…

一度思考をやめ、彼の姿を確認する、それは今まで見てきたどのI
Sとも違っていた。

全身装甲？ISはシールドバリアーがあるから、装甲は必要最低限
しか必要ないはず。

まあ、なんでもかまいませんわ。わたくしは彼が待ち望んだ人物で
あるかを確かめるだけ。

「最後のチャンスをあげますわ」

彼に形だけの最後通知を告げる。

「必要ないな」

分かつてはいたが、立ち向かってきてくれたことに安堵する。

「そう？残念ですね。それなら」

「お別れですわねっ！」

side end

ISバトルはシールドエネルギーをゼロにされたら負け。

このままではマズイ！なんとかして機体と合わせなければ。

「さあ、踊りなさい。わたくし、セシリア・オルコットとブルー・ティアーズの奏でる円舞曲で！」

射撃射撃射撃雨の如き弾幕が降り注ぐ、しかもただ撃っているだけじゃなくしつかり狙いも付けているのだからタチが悪い…まあ狙いが正確すぎて本来なら、楽に避けられるんだが

「この状態ではっ」

体と機体の反応が合わないためどうにも避けきれない。

とにかく武装を確認しなければ。

展開可能装——ビームライフル、ビームサーベル
まあ、予想通りの武装か。

射撃専用機体にビームライフルで挑んでもしかたない。

ビームサーベルをコールする。

ヒュイイイン

高周波音と、ともに左腕から光の粒子が放出される。それは手の中

ですぐに形となって収まった。
柄からビーム刃が形成される。

「中距離射撃型であるわたくしに、近接格闘装備で挑もうだなんて……笑止ですわ！」

すぐさま射撃が来るがなんとか躲す。
ようやくタイミングがつかめてきた。

えらい苦勞させられた、アムロ・レイはよく反応速度の遅い機体で戦えたな……いや初戦じゃこんなもんか、体感はしていても実際にやるのは初めてだしな。

「三十分。よく持ちますわね。褒めて差し上げますわ」

「そりやどうも」

シールドエネルギー残量321、実体ダメージ小破
タイミングがつかめたため、回避は普通にできるようになったが攻撃に転じて反撃を喰らうとまた、タイミングがずれてダメージをもたらしてしまった。

「このブルー・ティアーズを前にして、初見でこうまで耐えたのはあなたが初めてですわね」

あの忌々しいファンネルもどきのビットを撫でる。

まさかニュータイプ of 速過ぎる反応速度が仇となるなんてな。

おまけに俺がサイコミュ兵器を作ったせいか、原作より動きがいい。まさかここまで多角的に動けるなんて想定外だ、せいぜいジオングのインコム程度だと思ったんだが。

まったく馬鹿か俺は、実際に見てみなければわからない。常識だろうに……どうにも浮かれすぎていたようだ。

こっからは気を引き締めないと、これ以上の醜態はゴメンだ。

「わたくしにとつても楽しいひとときでしたわ。でも楽しい時間は早く過ぎ去ってしまうもの…そろそろフィナーレと参りましょう」
上下左右をビットで囲んでくる、どこに回避しようとか次を撃てるわけだ、単純だが効果的だ。

反応速度を抑えてなんとか回避していたが、状況把握がうまくいつてなかったようだ。

セシリアに右半身を晒している状態だ。

「右足いただきますわ」

マズイ、右足は装甲が限界に近いスターライトを喰らえば絶対防御が発動する可能性がある。

しかたない、正面から突っ込み銃口を逸らす！
ガギンッ

右腕で銃身を跳ね上げ銃口を逸らす。

「なっ……！？無茶苦茶しますわね。けれど、隙だらけですわっ！」
セシリアは後ろに下がりビットを飛ばしてくる。

向かってくるビットにこちらから突っ込み飛んでくる閃光を回避し、
ビームサーベルを一閃。

ビットが爆発する前に回避…爆散。

「なんですって!？」

そのままの勢いで突っ込み袈裟斬りをしかける。
回避されるがシールドを削る。

「くっ…！」

後退し残りのビットを飛ばしてくるがそろそろ俺も真面目にやらないと鈴と義姉さんになに言われるか分からのね。
ビームライフルをコールし右手に形成。

なにも今までなめてたから使わなかった訳じゃない。

こういうものは効果的な場面で使うものだ！

バレルロールで前方の射撃を躲し、上空からビームライフルを発射、後ろにあったビットも含め、三機まとめて破壊。

「そんなっ……！？このときのために、いままで射撃武器を使わなかったのですか！？」

「ま、そういうことだ。相手にむやみに武装を晒すもんじゃない、使いどきってもんがあるからな」

「くっ……でも、まだですわ！」

「はああ……さすがですねえ、一夏君」

ビットのモニターで見ていた山田真耶が感嘆の声を上げるが千冬はひどく不満そうだ

「あそこまで随分かかっていたがな、一夏の奴余裕を出し過ぎてしてやられたな」

「それにしてもちよつと変じゃありませんでした？なんかやけに動きが悪かったし」

鈴が不思議そうに千冬に尋ねる。

「おそらく一夏の反応速度に機体がついてこないのだろう」

「ああ、それですか。初弾が当たった時点でおかしいと思ってたんですよ」

「いくらあの馬鹿でもなんのデータもなしに、一夏の反応速度合う機体は作れんということだ」

「一夏君で凄いんですねえ」

「いままで使っていなかった武器を出したということは、そろそろ勝負を決めるつもりだろう」

「でしょうね、相手のリズムを崩すの得意ですからねえ一夏の奴」
三人が話している中、箒はじっとモニターを見つめていた。

のほほんさんは観客席でのほほんと見ているだろう、一夏の勝利を疑わずに。

さて、そろそろ決めようか。

牽制にビームライフルを三連射し、セシリアに向かって突撃、スターライトの迎撃は間に合わん、これで終わりだ。

「かかりましたわ」

セシリアがにやりと笑う。

しまったな、これがあつた。

「おあいにく様、ブルー・ティアーズは六機あつてよ！」

ミサイルが飛んでくるが、慌てず騒がずギリギリのタイミングでライフルで迎撃する。

ドガアアアン

「一夏っ…！」

箒は思わず声を上げる。

「相変わらず手の込んだことをする奴だ…普通に回避もできたらうに」

「エンターテイメントとか言ってるんじゃないですか？」

黒煙が晴れたとき、先ほどと変わらないユニコーンの姿があった。そしてかすかに漂っていた煙が光によってはじけ飛ぶ。

そこには形が変化した、白亜の機体があった。

そう、真の姿で…

フォーマットとフィッティングが終了しました。確認ボタンを押して下さい。

うむ、タイミングバッチリこれぞエンターテイメント。

確認ボタンを押し作業をすすめる。

キュイイイーン

甲高い金属音が鳴り響く。

刹那ISが光となって弾け、新たな形を形成する。

実体ダメージが消え、洗練された装甲に変化する。

「ま、まさか……ファースト・シフト！？あ、あなた今まで初期設定だけの機体で戦っていたって言うの！？」

おーおー、驚いてる、まあ今さっききたことを知らないんだから当たり前前っちゃあ当たり前だが。

でもこれではようやく不自由な機体から解放される。

サイコフレームのおかげで機体の細部までよく分かる。これならなんの問題もない。

ユニコーンも不自由な鎖から解放されて喜んでいるようだ、こいつ

も獣だからな。
それにしても

「ふつくしい」

装甲はより鋭角的になりシャープになっている、元々白かった装甲がまるで処女雪の如く白くなっている。そしてなによりも特徴的なのが頭部だ、これがないとユニコーンじゃない、雄々しく突き出た一本角。

オールウェポンアクティブ

シールドバリアー展開不可

絶対防御使用不可

IS-Dシステム使用不可

まだ、マツチングが終わってないせいで機能不全があるが問題ない。さて、そろそろ始めよう俺の物語を。

黄泉がえった日から失っていた生きている感覚を感じられる。
そう

「俺は今、生きている!」

「な、なにを言って…」

「セシリア・オルコット、さっきお前が言った通りそろそろフィナーレといこうじゃないか」

「…そうですね、もう終わりにいたしましょう!」

「セシリア・オルコット、これはサービスだ、避けるよ」
ビーム・マグナムをセシリアに向かって一発撃つ

「くうっ……そ、そんな、かすっただけでシールドエネルギーが…」

「よく避けたな、じゃあ続きといこうじゃないか!」

ミサイルを連発しながらライフルを放ってくるが、ミサイルなんて戦闘機の動きをすれば避けるのは――

「たやすいっ!」

飛んでくるレーザーはシールドで防御。

ビーム・トンファアを展開し、突撃しようとして思い出した。

「この機体フアングあるじゃん」

テンション上がってフアングの存在を忘れてた、このときのために用意したのに。

「ってことでいけよっフアングッ!」

四機をセシリアに向かって飛ばす

「くっ…こ、これは」

「ビット兵器が君だけのものと思って貰っては困るな」
残りの六機も飛ばしビームの雨を降らせる。

「意外とねばるな、でもこれで終わりだ」

ビームを乱射しダガーモードへ変化させ突撃させる。

「これでカーテンコールだ」

ドストドストッ

ファングがセシリアへと突き刺さる。

「アンコールはなしだぜ」

「試合終了。勝者織斑一夏」

「任務完了」

「わたくしが…負けた…」

「お前の腕は悪くなかった。ただ俺の方が上だった、そして相手が悪かった。それだけだ」

そう、なかなかよかったよ。ただのかませかと思っただらそうでもないみたいだ。

まあ機体がいまいちのようだから機体が完成すれば気体できるかな。まあサイコミュはやらんが、アドバイスはするか…強くなれば俺も楽しめるし。

それに、あの状態で諦めなかったのは素晴らしい。

あの威力を見せれば怯むかと思っただけどそんなんでもなかったし、努力で代表候補に上り詰めたってのもあながち嘘じゃないようだ。

ピットに戻ると義姉さんたちが労いの言葉で迎えてくれた。

「よくやった。一夏」

「さすがね一夏」

「すごかったですよ、一夏君」

「そ、その…よくやったと思うぞ」

「なかなかエンターテイメントな勝負だったと思うけど、どうだった？」

「やはりわざとか」

「まあね、予想より強かったからそれなりに楽しめたよ」

「相変わらず嫌らしい戦いよね」

「酷い言われようだ、俺はエンターテイメントを提供しただけなのに」

「それが趣味悪いって言うてんのよ、わざわざ相手と同じ武器で仕留めるなんて」

「セシリア・オルコットが予想より強かったからな、弱かったら速攻で終わらせたんだけど」

「最初は素で動き悪かったくせに」

「あ、あれもエンターテイメントの一環だ」

「ふーん」

「まあ、とにかく次は鳳と試合の予定だったが…一夏、お前のISを見せてみる」

「な、なんでかな義姉さん」

「いいから見せろ」

「わかったよ…義姉さん」

「やっぱりな」

「どうしたんです？織斑先生」

「シールドバリアーと絶対防御が稼働していない」

「ええっー！！なんですか！？」

「おそらく最初に入れたシステムのせいだろう」

「あ、あははよくわかったね義姉さん」

「どうにも変な感じがしてな」

「これじゃあ試合は中止だな」

「なんでさ！俺すっげえ楽しみにしてたんだけど！」

「こんな状態でやらせることができるか」

「あんたってやっぱり抜けてるわよねえ」

「じゃ、じゃあ一撃！一回打ち合うだけでもいいから！」

「……」

「お願いっ、義姉さん」

「はあ、一撃だけだぞ」

「ありがとうっ、義姉さん」

「いいんですか？織斑先生」

「間違っても全力はだすなよ」

「了解！」

「じゃ、行きましょー夏」

俺はいまアリーナで鈴と対峙している。
これだよ、俺はこのときをまっていた！

「一撃ってことだし、まずは軽く」

ドンッ

見えざる弾を回避する。

「やっぱり一夏にこれは当たらないか」

「見えない攻撃なんて見える攻撃より避けやすいぞ」

「ならこれでいくしかないしょ」

そういつて鈴は連結した双天牙月を右手に構える。

「戦いの基本は格闘だ」

俺も左腕のビーム・トンファーを構える

「やああああっ」

「はああああっ」

ガギイイイン！

鈍い音を立ててぶつかり合う。

鈴は振り下ろしで俺は振り上げた。たため若干押され気味だ。

一瞬力を抜いていなし、すぐさま右腕にトンファーを展開し鈴に向けて踏み込み、振るう。

鈴もすぐに立て直し、回転させて左腕に移行し、振るう。

クロスした形になったが、踏み込み刃の根本あたりで左腕のビーム・トンファーで止め、右腕のトンファーは鈴の首筋にピタリ。

「私の負けか」

「ふっ勝ったな」

「ていうか、あんたのそれずるいわよ」

「トンファーか？」

「持たずに展開可能ってなによそれ」

「ふふふ、ユニコーンは隠し武器満載なのだよ」

「私の甲龍じゃ相性あんたには悪いしね」

「せめて手持ちの銃を持つことだ」

「ま、なんにせよこれで終わりね」

「俺はものたりんがな」

「模擬戦ならいつでも付き合っただけから我慢しなさい」

「わかったよ」

終わったことを義姉さんに報告しにピットに戻る。

「終わったよ、義姉さん」

「よし、なら今日はもう終わりだ。解散」

「一夏、部屋に帰りましょう」

「そうだな」

これで代表か…面倒だが、戦えるならまあいいか。

第7話・クラス代表決定戦 - (後書き)

ようやくバトルをアップ。

鈴は尺と話の都合上ラストの締めの方に

次はもうちよつとはやく更新できたらいいなあ。

鈴がヒロインしてるのを想像できなくなってきたんだがみなさんどうでしょう。

原作の呪いか？

閑話・それぞれの想い・（前書き）

次話の構想が纏まらないのでとりあえず心理描写の練習として書いてみた。こんな感じでいいのかな心理描写って。

次話をどうするか迷っているんでアンケート的なものをします

閑話・それぞれの想い・

セシリア side

サアアアア……。

シャワーノズルから熱めのお湯が噴き出す。水滴はシミ一つない美しい白い肌に当たっては弾け、またボディラインをなぞるように流れていく。白人にしては珍しく均整の取れた体と、そこから生まれる流線美はちよつとしたセシリアの自慢だ。しゅつと伸びた脚は艶めかしくもスタイリッシュでそこいらのアイドルに引けを取らないどころか勝つてすらいるくらいである。

胸は同年の白人女子と比べると幾分慎ましかではあるが、それが全身のシルエットをラインを整えている要因でもあるので本人としては複雑な心境らしい……鈴が聞いたら怒り狂いそうな話である。

しかしそれも白人女子に限定すればの話であつて、日本人女子と比較すれば充分どころか大きい位だ……冨は例外である。

その胸にシャワーを浴びせながらセシリアは物思いにふけていた。

（今日の試合——）

どうしてファーストシフトしたとたんに、動きがよくなったのかいまだにわからない……いや、可能性は考えられるが認めることは難しい。

（ISが動きについていけないなんて）

だがそう考えると納得がいく。ファーストシフト後の未来予知じみた反応、倍近く速くなった動き。

（負けたというのに）

それも自分のお株を奪われた形だ。だというのに不思議と気持ちには落ち着いていた。いつだって勝利への確信と向上への欲求を抱き

続けていた自分がだ。

（織斑一夏――）

あの男子のことを思い出す。あの、強い意志と絶対の自信を宿した瞳を。

他者に媚びることのない眼差し、それどころか逆に興味を見いだせず諦観して見下したようなそれは、不意にセシリアの父親を逆連想させた。

（父は、母の顔色ばかりうかがう人だった……）

名家に婿入りした父。母には多くの引け目を感じていたのだろう。幼少の頃からそんな父親をみて、セシリアは『将来情けない男とは結婚しない』という思いを幼いながらに抱かずにはいらなかった。そして、ISが発表されてから父の態度は益々弱いものになった。母は、どこかそれが鬱陶しそうで、父との会話自体を拒んでいるくらいがあった。

「……………」

母は強い人だった。女尊男卑社会以前から女でありながらいくつもの会社を経営し、成功を収めた人だった。厳しい人だった。だけど憧れの人だった。

そう『だった』。両親はもういない。三年前に事故で他界した。

いつも別々に過ごしていた両親が、どうしてその日に限って一緒にいたのか、それは未だにわからない。

一度は陰謀説がささやかれたが、事故の状況はともあつさりそれを否定した。越境鉄道の横転事故。死傷者は百人を越える大規模な事故だった。

とてもあつさりと、両親は帰らぬ人になった。

それからあつという間に時間が過ぎた。

手元には莫大な遺産が残った。それを金の亡者から守るためあらゆる

る勉強をした。その一環で受けたIS適正テストでA+が出た。政府から国籍保持のために様々な好条件が出された。

両親の遺産を守るため即断した。

第三世代装備ブルー・ティアーズの第一運用試験者に選抜された。稼働データと戦闘経験値を得るため日本にやってきた。

そして出会ってしまった。織斑一夏と。理想の、強い瞳と意志をした男と。

「織斑一夏……」

自分の理想を体現したような存在……初めて見たときから他の人とは違う雰囲気 を放っていたため、話しかけてみて理想の相手かもしれないことがわかった。それを確かめるために少々強引な手を使ってしまったが、結果は想像以上、理想通りどころか理想以上だった。

「……………」

熱いのにかく、切ないのに嬉しい。

意識すると途端に胸をいっぱいにし、溢れ出しそうになる感情の奔流をなんとか抑える。

——知りたい

彼のことを。

——知って欲しい

自分のことを。

「……………織斑一夏……………わたくしの」

……………運命の相手。

そう、きっと自分は彼に会うためにこの国に来たのだろう。

鳳鈴音と織斑千冬は強敵そうだが、負けるつもりはない。

「……………」

浴室にはただただ水の流れる音だけが響いていた。

s i d e e n d

千冬 & a m p · 真耶 s i d e

「一夏君はやっぱり凄いですねえ。本当にセシリアさんに勝ってしまっなんて」

「あいつならあれぐらいこなすと思ったが、ああもそつなくこなすとわな…まあ、相手も相手だったがな」

最初は油断していいようにやられていたがな。

「でもセシリアさんは新入生の中では上位ですよ」

「そもそも学生レベルでは相手にならん。まあオルコットの場合機体がマシならもうちょつとやれただろうがな」

学生でまともに戦えるのは更識と鳳くらいか。

「ブルー・ティアーズですか…たしかにあまりいい機体じゃありませんよ」

「所詮は実験用だ総合的な戦闘力は第二世代にも劣る」

オルコットも厄介な機体を押しつけられたものだ。

「代表候補生の機体ならもうちょっと実用性のある機体のはずなんですけどね」

「まあ、話は一旦終わりにしてさっさと仕事を終わらせるとしよう」

「そうですね」

side end

第side

「一夏、随分強かったんだな」

いつもあの人のところにいてあまり運動等はしていなかったからわからなかったが、やっぱり男なんだな…それにちょっと格好良か…ゲブンゲブン。

ま、まあせっかく再会したんだ幼馴染みとして仲良くしていくか

side end

本音 side

「まさか本当に勝っちゃうなんてねえ。それもあんなあつさり」
おりむーが予想以上に強いのか、せしりーが弱かったのかわからないが、少々想定外だ。

もうすこし苦戦するかと思ったけどあつさり決めちゃった。
なかなか格好良かったなあおりむー。

「そのせいであの人も興味持っちゃったみたいだしねえ」
最初に彼に目を付けたのはわたしなのに：まあ彼はわたしに好意的
みたいだし。

「しばらくは近くで見させてもらうよ。おりむー」
あの様子だとせしりーは堕ちただろうし、楽しみだなあ。彼がこれ
からどうするのか、なにをもたらすのか、ふふふつ。

side end

鈴音 side

「最後はあつさり決めてたけど」
最初は油断して苦戦するなんて一夏らしいといえば一夏らしい。
ナチュラルに相手を見下すから、そこを突かれて一矢報いられるの
は昔からだしね。

「でも一夏を相手にするならやっぱりあの戦い方がいいみたいね」
一夏の反応速度は未来予知じみているから、どんな攻撃をしても防がれたり躲される可能性が高い。それをさせないためには、近接戦闘に持ち込んでカウンターを行うこと。これが一番効果的で安全だ。

「まあ、あそこまでうまくやれたのは予想外だけど」
でもまあ、あいつといるならあれくらいできないとね。

「セシリアもさっそく墮としたみたいだしねえ、あの感じなら」
昔からモテてたしねえ…本人興味無しだったけど。
セシリアも苦勞するだろうねえ。

side end

一夏side

「セシリア・オルコット…か」
それなりにはできるみたいだな。いくら機体の反応が鈍くてしかも油断していたとわいえあも無様な醜態を晒すなんてな。
でも機体が悪いな。機体がよければもっと楽しめたんだが……でもさすがに手を貸したり武器を提供する訳にもいかないしなあ…本人に頑張ってもらうしかないか。
それなりの才能とセンスはあるみたいだし。

「そっぴやユニコーンのメンテしないとな」

ああ、そういうえば鈴は予想以上に素晴らしかったなあ。

まさか俺の攻撃に合わせてくるなんてな、最後なんてコンマ単位で反応してたし……ニユータイプじゃないよな……いや鈴がニユータイプなら俺が気付かないはずがない。

だとすると……ドミナントか？だとするとこれからが楽しみだ。さらに強くなるってことだろ、しかも加速度的に最高じゃないか。

「とりあえずこんなもんでいいか、後は束姉のところでだな」

そついや鈴が同じクラスだけど次の大会どうなるんだ？てかあの無人機って結局どこの差し金だったんだ？

束姉ならこないだろうし、亡国企業なら来るだろうな……うむわからん。まあそのときに対処すりゃあいいだろどうとでもなる。無人機とか最高のカモだし。

「ん？電話か……束姉からか」

side end

束side

さてさていつくんに機体も送ったし、いつくんの勇姿を觀賞すると思いますか。

「ふっふっふ、学園には行けなかったけど束さんにかかればいつくんの姿を24時間365日いつでも見ることが出来るのだー」

人それを覗きという。

あらら、やっぱり初期設定じゃいつくんの速度に追いつけないか。でもでもやっぱりいつくんは格好いいなあ。

おお、さすがだよいつくん。ファーストシフトしてから終わらせるなんて、エンターティナーだね。そだいつくんに電話しよーっと

t r r r r r r r r r r r

「はろはろーいつくんのアイドル東さんでーっす」

「久しぶり束姉、今日はどうしたの？」

「愛しいいつくんの声を聞くついでにユニコーンの感想を聞こうと思ってるね」

「ついであって…まあいいや、初期設定はちょっと手こずらされたけどユニコーンは最高だよ、さすが束姉」

「もっとほめてほめてーいつくんのために東さん頑張ったんだよー」

「うん。ありがとう束姉」

「えへへー。そだ後でデータ送っついてよ今後に活かすから」

「わかったよ束姉」

「学園はどうだい。いつくん」

「まあ可もなく不可もなくって感じかな。鈴がいるから退屈はしな

いけどね」

「ふーん。東さん妬けちゃうなあ」

「セシリア・オルコットもなかなかだったしね」

「今日戦ってた相手だっけ？」

「そうだよ。よく覚えてたね東姉」

「ビット兵器使ってたから記憶の片隅にね」

「あれどうにかしたいんだけどねえ」

「どゆこと？」

「機体がもうちょっとマトモならもっと楽しめたからね。やっぱりあのビットをどうにかしたいんだけど代表候補生の機体なんて国に直結だからねえ」

「ふむんいっくんがどうしても言うなら手はあるけどね」

「本当？」

「東さんに不可能はないのだよー」

「まあ、まだいいよ」

「そか、いつでも言っていていいよ。東さんはいっくんのお願いならなんでも聞いてあげようー！」

「ありがと、束姉」

「そのかわり、今度遊びに来てー束さん寂しくて死んじやいそう」

「あはは、わかったよ。休みには遊びに行くよ」

「うん、待ってるよーいっくん」

「束姉は最近どう？」

「特に問題は無いよー。見つかるほど束さんは間抜けじゃないのだ。そつえば最近ゆーれいくんの動きが怪しいんだった、いっくんなら大丈夫だと思うけどー応気をつけてね」

「幽霊がねえ、わかった気をつけるよ」

「いっくんになにかあつたら束さんハルマゲドンを起こしちゃうよ」

「そうならないように気をつけるよ」

「それじゃあまたね束姉」

「またねーいっくん」

ふふふやっぱいいいなあいっくんは、ますます好きになっちゃうよ。次に会えるのが楽しみだなあ。

side end

??? side

「織斑一夏…意外とやるじゃない」

「そうね、接触する時は気をつけないといけないかもね」

「織斑…一夏」

「気になる？」

「別に…ただあれがそうなのかと思ったただけだ」

「そう」

「なににせよあの篠ノ之束と関わりがある以上私たちの障害になるのは確実」

「彼もなんか考えてるみたいだし、はやめに排除した方がいいかもね」

「篠ノ之束と織斑千冬が守っているから迂闊に手は出せないがな」

「……………」

side end

閑話・それぞれの想い・（後書き）

次の大会と無人機戦どうするか迷ってるんでアンケートを取ってる。

1 なにも無しでさらっと流して次に行くもしくはわオリジナルを入れる
2 適当な代役を立てて原作通りにやる

3 まだ誰も出してないであろう人物をフライングで出してブレイク、
多分原作で本格的に出てきたときに困るだろうけど気にしない、w
i k i 見たら設定的にどうせハーレム入りするだろうし

作者的には3がやりやすいかも…後で困るだろうけど。（ぶっちゃけ出してみたいだけ）

シャルどうしよう。原作通り出すか変えるか

え？ 篇幅が短い？ 気のせいですよ。決して書き終わった後に見直して
いたらいないことに気付いて慌てて書き足したわけじゃありません
よホントダヨ

第8話・授業という名の訓練・（前書き）

日本が大変なことになってしまいましたがつりあえず更新
札幌最高ビバ札幌。

書くためにちよつと原作の見直しと情報の収集をしたら重要なこと
がわかったんで予定変更に。

後書きという名の言い訳に書いておきます。

第8話・授業という名の訓練・

翌日、朝のSHR。

「では、一年一組代表は織斑一夏君に決定です。あ、一繋がりでない感じですね！」

一繋がりて別にどうでもいいだろ。

しかし、面倒なことになった。戦うだけならまだしも、それ以外が面倒だ。そうだ、誰かに押しつけよう。俺がたのんだらきつとやってくれるにちがいない、そうだそうしよう。

「まあ、一夏さんはこのわたくしに勝ったのですから当然ですわ」

「おりむーすごかったよねー」

「ま、予想通りよね」

「これで面白くなりそうだねー」
俺は面倒だな。

「そうだねー。世界で唯一の男子がいるんだから、同じクラスになった以上持ち上げないとねー」

「私たちは貴重な経験を積める。他のクラスの子に情報が売れる。一粒で二度おいしいね、織斑君は」
だから商売するなら俺を通せと。

「そ、それですわね」

コホンと咳払いをしてあごに手を当てるセシリア。いつもの腰に手

を当てるポーズじゃないようだ。

「わたくしも自分の未熟さを痛感いたしまして、一夏さんもISに慣れることができるでしょうからその、訓練に付き合っていたきたいのですわ」

ふむ、確かに俺もまだ完全にISに慣れた訳じゃあないし、なににより訓練に付き合えばセシリアを強化することができる。つまり戦いがいのある奴が増えると言うこと…決まりだな。

「確かに俺も慣れている訳じゃあない、セシリア・オルコットお前の提案に乗ろう」

「ありがとうございます。それとセシリアと呼んで下さってかまいません」

「了解。ま、よろしく頼む」

「ちょっとちょっと、そんな楽しそうなことまさか私抜きでやるつもりじゃないでしょうね」

「なんだ鈴もやるのか？」

「当然でしょ。あんたがやるのに私がやらない訳ないじゃない」

「それもそうか」

（このままでは一夏さんと二人きりになれませんが……彼女も代表候補生で実力もたしか……仕方ありません経験を積む機会として我慢しましょう）

「ではこれよりISの基本的な飛行訓練を実施してもらおう。織斑、オルコット、鳳。試しに飛んでみせろ」

四月も下旬、遅咲きの桜の花びらがちょうど全部散った頃。俺は今日も教官もとい義姉さんの訓練を受けていた……めんどくせ。

「ボーツとしているな。早く展開しろ」

言われてISを展開してないことに気付いて展開させる。

ISは一度フィッティングしたら、ずっと操縦者の体にアクセサリの形状で待機している。セシリアはイヤークラス、鈴はブレスレット俺は白くなったアムロ・レイのパーソナルマークのユニコーンピラス。

ちなみに展開は言われた直後にした。展開なぞコンマ以下でできる。あのISの粒子を見るとコジマを彷彿するのは俺がフロム脳だからだろうか……シールドバリアーとかプライマルアーマーと言いたくなる。

それにしても妙な感じだ俺がユニコーンになったのかユニコーンが俺になったのか。後全身装甲だから気分的に暑苦しい、実際はそんなことないが。

セシリアのブルー・ティアーズも修復されているがどうやって修復したんだ。

「よし、飛べ」

言われて、セシリアが飛び上がる。続いて鈴が飛ぶ。最後に俺もバニアを吹かして飛び上がる。

少々行き過ぎたが問題ないだろう。

「速過ぎよたかが授業にどんだけスピード出してんのよ」

「確かにフルスキンなのになんりスピード出ますわよね」

「お前らのISが遅すぎるだけだ、それに装甲と機動性は両立しなければ意味がない」

「確かにそうですけどそう簡単にできるものではありませんわ」

「でもそれ作ったの開発者だしねえ」

「束姉ならそれくらい楽にやるさ」

「一夏っ！いつまでそんな所にいる！早く降りてこい！いきなり通信回線から怒鳴り声が響いた。

見ると、地上で真耶姉が放棄もとい幕にインカムを奪われておたおたしていた。

何故このイベントが起きている…まあ、どうでもいいか。

「そっといえば一夏さん、それ見えていますの？」

「見えてなければ動けるわけないだろう」

「それはそうですけど…」

「それ顔まで完全に覆われてるんだもの多少疑問に思っわよ」

「ゴーグルの部分がカメラになっているからそこから見える」

「織斑、オルコット、鳳、急降下と完全停止をやって見せる。目標は地表から十センチだ」

「了解です。では一夏さん、お先に」

言って、セシリアは地上向かう。それにしてもこうしていると感慨深いものがあるな、まさかロボットを操縦できる日がくるなんて。そう思いながら見ていると鈴も行くようであれに話しかけてきた。

「じゃ、私も行くは」

そう言って鈴も地上に向かう……俺も行くとするか。バーニアを切って地上に落下する。

一気に地上に堕ちていく感覚は遊園地の絶叫マシンみたいだ。

地上を見てみるとなぜか女子たちが騒いでいた。

地上手前でバーニアを吹かしてスピードを殺して。

ズシンッ

着地、完璧だ。

どうやら俺の華麗なる着地に声も出ないほど感動しているらしい。それでこそやったかいがあるというもの。

「一夏、着地してどうする。私は停止しろと言ったんだ。それと紛らわしいやり方はやめろ」

……しまった。ガンダムは停止なんぞしないからつい着地してしまった。

それにしてもたまに一夏って呼ぶよな義姉さん。

「紛らわしい？」

「やっぱりわかってなかったのね。あれ、端からみると落下してい

るようにしか見えないわよ」

「当然だろう。落下していたんだから」

「だから墜落するんじゃないかってみんな心配していたのよ」

「俺がそのまま墜落するような阿呆なわけないだろ」

「そりゃ私と織斑先生は」わかってるけど他のみんなはわからないんだから」

「なににせよサプライズは成功か」

「サプライズねえ」

「そう、退屈な授業に刺激をあたえようと思ってな」

「普通に受けるそして自重しろ」

義姉さんに釘を刺されてしまった…聞き入れるつもりはないが。

「織斑、武装を展開しろ。普通にな」

「了解」

言われてビーム・トンファーを展開する。

「……まあいい」

今の間はなんだろうか。

「オルコット、鳳、武装を展開しろ」

「はい」

「はい」

セシリアは左手を肩の高さまで上げ、真横に腕を突き出す。光が走りスターライトMK-？が出現する。

それを見て鈴も腕を前に突き出し双天牙月を展開して、肩に担ぐ。

「さすがだな代表候補生——ただし、オルコットそのポーズはやめる。横に向かって銃身を展開させて誰を撃つ気だ。正面に展開できるようにしろ。」

「で、ですがこれはわたくしのイメージをまとめるために必要な——」

「直せ。いいな」

「——、……はい」

反論の余地は大いにあるような顔をしていたセシリアだったが、そこは義姉さん、一睨みで話が終わる。いい兵士が生まれそうだ。

「セシリア、近接用の武装を展開しろ」

「えっ。あ、はいっ」

スターライトを収納し近接武装を展開しようとするセシリアだったが、なかなか形にならない。

「くっ……」

「まだか？」

「す、すぐです。——ああつ、もうっ！インターセプター！」
スパロボのように武器名を叫んでようやく形成される。

「……何秒かかっている。お前は、実戦でも相手に待ってもらいのか？」

「じ、実戦では近接の間合いに入らせません！だから問題ありませんわ！」

「ほう。織斑との戦闘で初心者に簡単に間合いに入られているように見えたが？」

「あ、あれは、その……」

「ごによごによとまごついているセシリアを眺めているとプライベートル・チャンネルが送られてきた。」

『あなたのせいですわよ！』
何故？

『あ、あなたがわたくしに飛び込んでくるから……』
抱きしめたいなあガンダムって感じにか？

『せ、責任をとっていただきますわ！』
なんのだよ

「というわけです！織斑君クラス代表決定おめでとう！」

「おめでとー」

ぱん、ぱんぱん。クラッカーが乱射される。

ちなみに今は夕食後の自由時間。場所は寮の食堂、一組のメンバーは全員揃っていた。

各自飲み物片手にわいわいと盛り上がっている。

「……………」

以上に高いテンションにビックリだ。

「いやー、これでクラス対抗戦も盛り上がるねえ」

「ほんとほんと」

「ラッキーだったよね。同じクラスになれて」

「ほんとほんと」

さつきから相鎚を打っている女子は二組だった気がするんだが…まあいいか。

明らかにクラスの人数以上いるけど気にしない。

「人気者だな一夏」

「にんきものだねーおりむー」

「人気者は大変だね」

「はいはい、新聞部です。話題の新入生、織村一夏君に特別インタビューをしに来ました」
インタビューねえ、めんどくせ

「あ、私は二年の黛薫子。よろしくね。新聞部部长やってます。
はいこれ名刺」
書きづらそうな名前だ。

「ではではぜひ織斑君！クラス代表になった感想をどうぞ！」

「感想と言われてもな」

正直面倒としか言いようがないがそれを言う訳にもいかんか。

「優勝は決まっているがせいぜい楽しませてくれよ、とか？」

「おおー！いいねーそれ！」

どうやらお気に召したようだ。

「はいはい、写真撮るから専用機持ちの三人は並んでね」

「えっ？」

「注目の専用機持ちだからねー。両手に華って感じで織斑君を挟む
といいかもね」

「なに？写真撮るの？」

鈴も気付いたようだ。

「あの、取った写真は当然いただけますわよね？」

「そりゃもちろん」

「でしたら今すぐ着替えて――」

「時間かかるから駄目」
「バツサリだな。」

「……」

「……なんだよ簿」

「何でもない」

「それじゃあ取るよー。 $35 \times 51 \div 24$ は――？」

「 74.375 」

「正解――」

パシャッとシャッターが切られる。

「なんで全員入っているんだ？」

恐るべき速度をもって、一組全メンバーが撮影の瞬間集結していた……のほほんさんとかどうやってはいった。

「あ、あなたたちねえっ！」

「まーまー」

「セシリアだけ抜け駆けはないでしょー」

「クラスの思い出になっていいじゃん」

「ねー」

「う、ぐ……」

苦虫を十匹くらいまとめて噛み潰したようなセシリアとやっぱりといった風な鈴をクラスメイトはニヤニヤとした顔で眺めていた。よもあれ、この『織斑一夏クラス代表就任パーティ』は十時過ぎまで続いた。

よくもまあ、あのテンションを維持したもんだ。

「今日はすごかったわねー」

「確かに、少々騒がしすぎて疲れたがな」

「あんた騒がしいの苦手だもんね」

「さすが我が親友はよくわかってる。だがわかっているなら助けてもいいと思うのだが？」

「あら、私の親友も私がああいうの好きだって知ってるはずだけど、そう、当然知っている。鈴に連れ回されたから、最初よりは耐性がついたが。」

「わかったわかった。俺の負けだ」

「ま、たまにはこういうのもいいでしょ。久しぶりだし」

「たまにならな」

「一応釘を刺しておかなければ。」

「とりあえず俺はもう寝る」

「もう寝るの?」

「ああ、今日は少々疲れた」

「そう、なら私も寝るは」

「そう言って着替え始める鈴。」

「そついや今更だがお前普通に着替えてるよな。羞恥心とか無いのか?」

「そう。こいつは俺がいても普通に着替えるのだ。」

「ちなみに見てもなんの反応もないぞ。最初なんかあまりにも普通に着替え出すから眺めていたよ。」

「からかわれてちよつとした論争が起こったが。」

「本当に今更ね。だいたいあんた相手に羞恥心もなにもないでしょ。昔からそつなんだし」

「そついやそつだったな」

「こいつは昔からだった……どうしてこうなった。」

「裸だつて見られてるし、あんただつて慣れてるでしょ」

「不本意ながらな」

「だったらいいじゃない。私もきにしないし」

「そこは気にしろよ女子として」

「そうはいつでもあんた相手じゃねえ。一緒にお風呂も入った仲じゃない」

「訂正を要求する。あれはお前に引きずり込まれたただけだ」

「でも結局入ったじゃない」

「お前が逃がさなかったんだろうが…」
そう。あれは大雨の日だった。

俺は鈴といたんだが突然大雨が降り出して傘もなかったから俺の家に急いで避難したんだ。

二人ともずぶ濡れになったから、風呂を入れて鈴に入るように言ったら、ちよっとして呼ばれたから何かと思って風呂場に向かったら引きずり込まれたんだ。

「…ってどう考えてもおかしいだろ！なんであの流れで引きずり込まれる！」

「濡れたままだと親友が風邪を引いてしまうと思って一緒に入ったのよ。なんて親友思いなのかしら私は」

「お前は……まあ今更言っても詮無きことか」

「そうそう」

「まあそういうなら俺も気にしないことにする。俺たちの間では些

細なことだ」

「それでこそ一夏ね」

「そろそろねるか、お休み鈴」

「お休み一夏」

第8話・授業という名の訓練・（後書き）

5巻までしか持つてなくて見直しをしていて6巻がどんな感じか調べたら使おうとしていたキャラが重要ポジションにいたことが判明。しばらくかなやんで予定変更にしました。さすがにあれを変えるのはマズイんで。

楽しみにしていただいた人には申し訳ありません。

札幌は被害ないんでこれから普通に更新していきます。

第9話・クラス対抗戦・（前書き）

随分かかってしまった。けどちょっとネットも調子が悪かったりモチベーションが上がらなかったから時間がかかってしまったんですよ。

け、けっして積みゲーをやっていたなんてことはアリマセンヨ。

第9話・クラス対抗戦・

「ああ、束姉ちよつとお願いがあるんだけど」

「なんだい？束さんいつくんのお願いなら世界征服だってしちゃうよ」

「ISを一機用意して欲しいんだ」

「ISを？いいけどなんで？」

「与えたい人がいてね」

「気に入ったの？」

「気に入ったね、あそこまで気に入ったのは鈴以来だよ。それに――
応俺の護衛なんだからそれなりの物が必要でしょ」

「ぶーぶー束さんちよつと妬けちゃうぞ。護衛なら確かにそれなりじゃないと意味ないね。まあ護衛が必要かは別問題だけど」

「いて困るものじゃないよ口裏も合わせやすいしね」

「それもそっかー」

「そついうわけだから頼めるかな束姉」

「そついうことなら束さんにお任せあれ最高の機体を用意するよ」

「ありがとう束姉」

「いっくんのお願いならいつでもなんでも聞いちゃうよ。それにしてもユニコーンはやっぱり変わった数値がでてるねー」

「変わってるってレベルじゃないけどね」

「まあ元々ISかどうかすら怪しい機体だからねー」

「設計思想がまるで違うしね」

「そうそう学年別トーナメントだっけ？そのときに全身装甲の無人機を乱入させるから」

「なんで？」

「最近ゆーれーくんがいっくんを探ってるみたいだからねいっくんに手を出すのは無理だって分からせるのにね」

「つまり圧倒的力を見せつけろと？」

「そのためのユニコーンでしょ？」

「くくっ確かにそうだね」

「束さんとしても稼働実験がしたいしねー」

「それでユニコーンにぶつけてみると」

「そゆこと。まあユニコーンほどじゃないけどね」

「ユニコーンクラスだと俺が困るよ…そろそろ戻るよ」

「もー帰っちゃうの?」

「あまり長居して嗅ぎ付けられても困るからね」

「ならいっくんパワーを充電させてー」

「はいはい」

ぎゅー

「…」

「……」

「……」

「……」

「…てっ長いよ束姉」

「うー」

「また来るからさ」

「……わかったよいっくん」

「それじゃ、またね束姉」

「またねーいっくん」

そんなわけでやってきましたトーナメントそれまでの時間はきにするな。

「調子はどうですかー夏さん」

「セシリアかなんら問題ないさ」

「それどころか余裕すぎて退屈だって言っんでしょ」

「よくわかるな」

「それだけ退屈そうな顔してれば私じゃなくてもわかるわよ」

「さっすがおりむー、余裕だねー」

「さらっと優勝してくるから俺の活躍に期待してくれ、のほほんさん」

「かつこいいところを期待してるよー」

「任せたまえ」

「そういえば一夏、あんたやけにその子に優しいわね」

「気に入っているからな。鈴以来だよ」

「ビックリしたわよ。あんたがそんな対応してるなんて私以外に見たことないもの」

「鈴以来だから二人目だからな、当たり前だ」

「なんでそんなに気に入ったのよ」

「さあな。しいて言うなら全身から滲み出ている癒しのオーラか？」

「癒しのオーラ？」

「ん？なーに？」

「た、確かに出てるわね」

「癒しかどうかは分かりませんが確かに出てますわね」

「わたしがどうかしたのー？」

「いや、どうもしないさ。ただのほんさんが抱きしめたいくらい
愛らしいというっただけだ」

「さらっと言ったわね」

「う、うらやましいですわ」

「おっとそろそろ時間だいつてくるよ」

「頑張ってくださいね」

「ま、適当にやんなさい」

「がんばってねー」

試合の組み合わせは俺と本来の二組の代表だ、あれだよ原作で鈴に
代表奪われた可哀相なモブ。

それにしてもすげー数、こつも人が多いとあれをいいたくなるな。
人がゴミのようだって。

（む、そろそろか…開幕ビーム・マグナムは勘弁してやるか）

本当は開幕ビーム・マグナムでさつさと終わらせようかと思ったがやめとくか、エンターテイメント性がないし。

恐るべしのほほんさんパワーってな、のほほんさんと会話してたらそんな気になった。

少々遊んで終わらせるか、メインが控えてるんだし。

あれはラハールもといラファールだな。

結構いい期待なんだよな基礎スペックの低さを除けば、特に武器を多数インストールして汎用性を持たせるなんてACっぽくて最高だね。

「それでは両者、規定位置まで移動してください」
とりあえず様子見だな

「それでは両者、試合を開始してください」

俺は動かないが相手はブザーが鳴ると即座に移動する。

どうやら敵も存外馬鹿ではないようだ。俺相手に正面にいるのは危険だと判断したらしい。

だがそれは悪手だ。俺を相手にするなら接近して中距離での銃撃戦にするべきだ。

一度距離を取れば俺は攻撃し放題だ…今回はしないがな。

「どうしたこないのか？」

とりあえず挑発してみる。

男に挑発されたからかヴェントを撃ってくるがアサルトライフルをそんな距離から撃って当たるはずもない。

「そんな距離から撃っても当たらんぞ」

ようやく中距離まで来たか…この距離ならすぐに詰められる。

「くははははっ、遅い遅すぎる。そんな攻撃じゃあ蠅すら仕留めら

れんぞ」

くくくつどんどん攻撃が雑になつてゐるぞ…そろそろか。

…途切れた

「ハーハッハッ、ノロイんだよ！」

全スラスターを吹かして前進、ビームサーベルを二本抜いて装甲のない腹に突き刺す。

絶対防御が発動して終わりと。

試合終了を告げるブザーが鳴る。相手は戻るが俺は戻らない、メイ
ンディッシュがこれからだからなあ。

…くるっ

ズドオオオオン！！！！

ステージ中央に赤黒いビームが突き刺さる。

「この粒子ビームの色はっ」

煙から三体の機影が浮かび上がりビームが飛んでくる。

「おつと危ないな」

赤いビームが飛んできたため回避したが…

「おいおい、この三機かよ」

ガンダムスローネアイン・ツヴァイ・ドライだった。

「これをチョイスしたのか…まあ太陽炉積んでるわけじゃないしそんなに厄介な相手じゃないか」

アインはそのままのようだがツヴァイはファング積んでるのか？それにドライは完全に電子専用にしたみたいだな、こっちの計器がいかれてる。

「一夏君っ！今すぐアリーナから脱出して下さいっ！すぐに先生た

ちが制圧に向かいます！」

珍しく声に覇気がある、代表候補生時代のような。
けどそれに応じるつもりはナッシング。

「いや俺がやりますよ。それに全部閉鎖されてますから」

「もしもし！？一夏君つ聞いてます！？」

ISのプライベート・チャンネルは声に出す必要はないがそんなことを失念するほど真耶は焦っていた。

「本人がやると言っているのだからやらせてもいいだろう」

「お、お、織斑先生！なにをのんきなことを言っているんですか！」

「落ち着け。コーヒーでも飲め糖分が足りないからイライラするんだ」

そもそも糖分摂取にコーヒーを飲む奴はいないと思うがそれ以前に

「…あの、先生。それ塩ですけど……」

「……………」

「なぜ塩があるんだ」

「さ、さあ……？でもあの、大きく『塩』って書いてますけど……」

「……………」

「先生！わたくしにISの使用許可を！すぐに出撃できますわ！」

「無駄だと思うよ」

「そうしたいところだが、どうやら一夏の言っていた通りのようだ……これを見る」

「遮断シールドのレベルが4に設定……？しかも、扉がすべてロックされて——あのISの仕業ですよ！？」

「そのようだ。一機だけ離れた所にいるだろう、あれがやっているのだろう。これでは避難も救助もできない」

実に落ち着いた様子ではなす千冬だがよく見ると苛立ちが抑えきれないよう指で画面を叩いている。

「で、でしたら！緊急事態として政府に助勢を！」

「無理だ。学園の全ての通信機能を妨害されている。現在三年の精鋭がシステムクラックを実行中だが芳しくない。おそらくあの赤い機体のせいだ」

「ならシールドを破っちゃえばいいんじゃないですか？」

「シールドのレベルは4だぞ、そう簡単に破れん。それこそユニコーンのビーム・マグナムクラスの威力が必要だ」

「やっぱり千冬さんも焦っているんですね」
鈴がやっぱりといった風に言う。

「なに？」

千冬が目がギョロっと鈴に向く。

「複数のISの一点集中なら破れるんじゃないですか？」

「一点集中…確かにそれなら破れるかもしれないが突入する人員がいなくなるぞ」

「私が行きますよ。一夏との連携ならプライベート・チャンネル無しでもできますし」

「わたくしも行きますわ！」

「お前たちがいけば三体三か……それでいくぞ」

「い、いいんですか！？織斑先生！？」

「いいもなにも現状それしか方法がない。あの赤い機体がある限り外からは無理だろうしな」

「た、確かにそうかもしれないませんが」

「なにもしないよりマシだ」

「くそつやりずらい！」

この三機元々協同で運用で作られてる上に束姉プログラムのせいで

かなり連携がうまい。

ドライが一番ウザイ、合間でチマチマ撃ってきやがって。

「だがこの程度ならデストロイモードを使う必要もないか…あまり人目に晒したくないしな」

デストロイはお預けだなそろそろ使ってみたいが。

「これでもくらえっ」

アインにビーム・ガトリングを乱射する。

ツヴァイがバスターソードで斬りかかってきたので迎撃する。

ツヴァイのバスターソードと鎧迫り合いしながらもう一本のビームサーベルで斬りつける。

ツヴァイが後退してファングを飛ばしてくる。

「くそつやつぱファングもあんのかよ！」

ファングのビームを避けながらアインに接近する。

「邪魔だっ！」

ファングをビームサーベルで切り落とす。

直感が俺に危機を告げる。

「くっ…」

間一髪でアインのビームランチャーを回避する。

「さすがに束姉謹製はそう簡単には倒せないか……だが……楽しいなあ！最っ高だ！」

そう俺はこんな戦いを求めている。

「とことんやろうじゃねえか！」

三機に向かってビーム・マグナムを撃つ。

アイン・ドライ、ツヴァイに別れて回避する。
狙い通りだ。

「ドライを守らなくちゃいけないからそういう編成になるよなあ。
でもが狙いなんだよ！」

ツヴァイに一気に接近してビームサーベルで斬りかかる、そんな時に鈴から通信がくる。

「一夏、あの赤い機体の頭部破損させられる？」

「はっ誰に言っただよ、楽勝だ」

「そう、ならやりなさい。そうしたら私たちもいけるから」

「俺一人でも十分だしようやくエンジンがかかったんだがなあ」

「いいからやりなさい」

「わかったよ、まったく」

気は進まないがやるか。

ツヴァイをはじき飛ばし反転。

ドライに向かって前進、アインがビームライフルを撃ってくるが問題ない。

「スローネは三機で一機、一機でも欠けると戦力は半減する。この場合同士討ちを避けるためビームランチャーは撃てない」

俺の後ろにはツヴァイがいるから俺が避けたら当たるようなビームランチャーは撃てない。

そしてビームランチャーさえなければアインは普通のガンダムにすぎん。

「吹っ飛べ！」

アイン・ドライにビーム・マグナムを撃つ。
当然避けられるが

「隙だらけだ！」

ドライに肉薄して頭部を切る。

ドガアアアアン！！！！

「私も混ぜなさいよ！」

「お待たせいたしましたわ！」

鈴とセシリアが来たようだ。

「鈴はオレンジの近接型、セシリアは赤の電子戦型をやれ！」

「オツケー！」

「了解ですわ！」

俺は残ったアインだ、ツヴァイのファングはもう数機しか残ってないしドライはそもそも戦闘に不向きだから加勢する前に終わるかもな。

「喰らいなさいっ！」

鈴が双天牙月をツヴァイに振るう。

「お行きなさい、ブルー・ティアーズ！」

セシリアがドライにブルー・ティアーズを飛ばす。

「蜂の巣になれ！」

ビーム・ガトリングを撃ちまくる。

回避しようとしているがこの弾幕だよねまい。

「終わったか」

しばらく撃っているとは機能停止したのか地上に堕ちた。

「これで終わりよ！」

ちょうど鈴がツヴァイを双天牙月で真つ二つにしていた。

「これにて終曲ですわ！」

セシリアもスターライトで機体の中心をぶち抜いていた。

「なんともあつけないおわ——」

「!？」

咄嗟にシールドを掲げる

「エフィールドっ」

機能停止していたアインがビームランチャーを撃ってきた。

「あり得るのかこんなISが…」

とか言いつつビーム・マグナムを発射。

ドガアアアアン!!!

「やれやれさすがに焦ったぜ」

アインは爆発してこんどこそ完全に停止した。

「一夏よくやった。鳳とオルコットも大丈夫だったか？」

「あれくらいなら楽勝ですよ」

「ええ、被弾もありませんし問題ありませんわ」

「後のことは我々教師に任せておけ」

「そういう後始末はおまかせします」

「三対一すごかったねー、おりむー」

「一人でも三機とも始末できたんだけど二人が混ぜてくれって言うからな」

「なににせよよくやった私は仕事に戻る。お前たちも休んだら部屋に戻っていいぞ」

学園の地下五十メートル。そこにはレベル4権限を持つ関係者しか入れない、隠された空間だった。

機能停止したISはすぐさまここに運び込まれた…と言っても原形を留めているのはドライくらいだが。

千冬は何度もアリーナでも戦闘映像を見ている。

「……………」

室内は暗くディスプレイの明かりに照らされた千冬の顔は鋭く冷たい雰囲気を出していた。

「織斑先生？」

ディスプレイに真耶が写り出す。

「どうぞ」

許可を貰った真耶はいつもより力強い動作で入室した。

「あのISの解析結果ができました」

「ああ。どうだった？」

「はい。あれは——無人機です」

世界中で開発が進むISの、そのまだ完成していない技術。遠隔操作が独立稼働あるいはその両方の技術があつたISには使われている。その事実が、すぐさま学園関係者に箝口令が敷かれるほどだった。

「どのような方法で動いていたかは謎です。皆さんほとんど原形を留めないレベルで破壊しちゃいましたから」

「コアはどうだった？」

「それが…三機とも登録されていないコアでした」

「そうか」

やはりか、とどこか確信じみてつぶやく。

「なにか心当たりがあるんですか？」

「いやまだない。単なる推測だ、無人機などまだ試作すらできていない物だ。そんな物が登録されているコアを使うはずがない」

「いやー今日は楽しかったなあ」

「相変わらずねえ、一歩間違ったら死んでたつていうのに」

「死ぬ？俺が？あはははは。それはありえない。死の神に魅入られ祝福された俺が死ぬなど地球が滅びでもしないかぎりないな」

「その妙な自信も相変わらずね。最初から真面目にやってれば一人で三機と戦えたのに、まあ私も貴重な経験つめたからありがたかったけどね」

「俺はスロースターターなんだよ」

「あれなんだったの？」

「無人IS。どこの国も実用化してない机上の機体」

「それがなんで来たのか言う気はないの？」

「気にする必要もないことさ。ファルスにすぎないのだから」

「あんたが仕組んだの？」

「俺じゃないさ」

「…てことはあの人ね」

「さあ？どうだろうね」

「まあいいわ……ねえ一夏」

「なんだ？」

「私の機体強化できない？」

「機体の強化はできる」

「利権が面倒ってこと？」

「まあな。それがなきゃすぐにやってる。火力不足もいいところだ」

「燃費はいいけど火力がねえ」

「まあ良い方法を考えとくよ」

「ありがとう」

「一番楽な方法は使いにくいからなあ」

「どうするの？」

「国所属から企業所属に変える」

「それは確かにやりにくいわね」

「力業でならできるけどな」

「穏便にやるにこしたことない…か」

「そついうこと。まだ強引にことを進めるべきじゃない」

「ま、うまいことできるよう考えといてよ。今日は寝ましょ」

「そうだな。お休み鈴」

「お休み一夏」

「うーん、さすがいつくんだなーまさかああもあっさりやられちゃうなんて。他二人もそれなりにできるみたいだし」

巨大なディスプレイを見ながらウサミミを付けたアリスがつぶやく。

「でもでもこれで第一段階だねっ。これではーれーくんはどう動くかじゃー?」

ウサミミのくせにチエシャ猫のように嗤う。

「いつくんと私のためにもはやめに消えてもらわないとねー」
くすくす嗤いながら作業をする。

「不思議の森にはこわーい怪物が住んでるんだよー」

第9話・クラス対抗戦 - (後書き)

のほほんさんをレギュラー化します。

変わりに放棄さんがフェードアウトすると思います。(ぶっちゃけ存在をなかったことにしたい)

デストロイモードを期待した人はごめんなさい。

多分銀の福音戦で使います。

のほほんさんに専用機を上げる予定なんですが機体をなににしようか考え中なんでリクエストあったら感想に書いてください。

次からはなるべく一週間に一回は更新したい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8706q/>

IS-インフィニット・ストラトス-二度目の人生

2011年4月3日05時13分発行